

〔資料〕

## 中世・近世の貨幣市場

——課題と方法——

R・ドウ・ロウヴァー著

楊 枝 嗣 朗 訳

(Raymond de Roover, "Le marché monétaire au Moyen Age et au début des temps modernes. Problèmes et méthodes," dans Revue Historique, no.495, Juillet-Septembre 1970)

付論——訳者あとがきにかえて——

R・ドウ・ロウヴァーの貨幣市場論と為替手形

——信用貨幣と信用制度(1)——

経済学者は貨幣市場と金融市場、すなわち資本市場をはっきりと区別している。前者は短期信用を、後者は長期投資をとりあつかう市場と理解されている。本稿では貨幣市場、資本市場を経済学者が右に与えたと同じ意味に理解している。一五世紀以降、主にイタリアの共和国諸国において、たしかに公債売買がおこなわれていたとはいえ、中世、近世の商業資本主義制度下では資本市場は実のところ、ほとんど存在していなかった。しかし、十分に組織された貨幣市場の存在は、ほとんど疑問の余地のないところであり、商人がつかつていた提要、銀行家自身の書簡、為替相場の統計、その他の豊富な資料で確認されている。とはいえ、時代錯誤に陥つてはならない。その時代の貨幣市場の構造は、今日の市場とその膨大な額の取引量を別にしても決して同じではなかった。

二つの時代、すなわち現代と本稿で考察する時代との著しい相違を生みだしたとりわけ重要な事実、利付貸付を『徴利 (usure)』として禁じたローマ・カトリック教会の姿勢である。中世・近世の神学者や教会法学者の定義によれば、『金利』とは貸付という手段で直接、貸付だけから派生するあらゆる収益を含んでいた (*usura est lucrum ex mutuo ratione mutui*)<sup>(1)</sup>。この定義のどの語もゆるがせにしない。まず、受けとった利子が途方もなく高率か、妥当なものかといったことには関係がなかった。利子率の高低が問題ではなく、たとえ、それがどれほど僅かであろうが、貸付から出たものでありさえすれば、すべての収益は『金利』である。それ故、貸付がなければ『金利』は存在しない<sup>(2)</sup>。もし、契約が明白であれ、あるいは暗々裡であれ、貸付でないことが証明されさえすれば、『金利』が生じる余地はないのである。

この見地は銀行の発展と貨幣市場の構造に非常に重大な結果をもたらした。例外をおくとして、神学者達は為替 (*cambium*) 契約を貸付とはみていなかった。乾燥為替やあるいは仮空為替のように貸付を隠蔽するのにそれをつかうのではないならば、為替契約は『金利』を生み出さなかった。為替で利を図ることは完全に正当であつたが、為替手形の割引は『徴利』とされた<sup>(3)</sup>。その結果、中世の銀行家は、手形割引に立脚するのでなく、両替 (*le menu change*

des monnaies, banque locale) であれ、隔地間の為替 (le change de place à place, banque internationale) であれ、為替取引から生成したのである。それに、銀行家《banquier》という言葉は為替業者あるいは両替商と同義であつた。銀行家達は、自らを『高利』貸とみなすどころか、大胆にもローマ法皇の為替御用達 (campsors domini papae) と自称していた。<sup>3</sup> ピエモンテ (Piémonte イタリア西北部地方—訳者) 地方、アレッサンドリア (Alessandria) の一三世紀の神学者、アレッサンドロ・ロンバルド (Alessandro Lombardo)、またの名はアレッサンドロ・ダ・アレッサンドリア (Alessandro Da Alessandria) によれば、ローマ・カトリック教会は『高利』貸をきびしく排撃しながらも、為替業者を社会の有用な成員として敬意をはらつて対処するだけの理由をもつていた。<sup>5</sup> かくして、銀行家達は『微利』という汚点の一切から無縁であつた。勿論、彼等の取引が正当な、すなわち神学者からみて正当な為替取引にかぎられているかぎりではあるが。このようにして神学者の教義は、その活動領域を利付貸付から為替取引に移すのである、銀行が存在し、繁栄することを認めていたのである。

現金取引である、たんなる貨幣の両替はなんら非難をうけることはなかつたが、隔地間の為替 (le change de place à place) は、為替 (cambium) 契約のあいまいな性格そのものから、不正行為にかかわつていたため、若干の悶着をひきおこした。為替契約は、あるところでの資金の前貸と別なところでの返済、それもいつもというわけでないが、大抵の場合、外貨での返済を伴う契約と定義することができる。<sup>6</sup> コミュニケーションが緩慢なために、あるところでの契約の締結と別のところでの契約の執行との間にならず多かれ少なかれある期間が介在していた。したがつて、場所の隔たりがかならず時間の猶予を生み、そのために為替契約は、信用取引と結びついた為替取引を不可避に生みだしていたのである。<sup>7</sup> 隔地間為替の正当化を切望する神学者は、少なくとも一九世紀に電信が発明されるまで、空間の隔たりが同時に時間の隔たりを生むことを忘れ、場所の違いを遵守することを力説してやまなかつた。

cambium すなわち、為替契約をなすために求められた証書が為替手形であつた。その名称がはつきりと示すよう

に、為替手形は元来、常に場所と貨幣の相違を伴う為替取引を基礎としていたのであつて、ずっと以降の、例えばフランスで一八九四年に規定された単なる支払委託書 (un mandat de paiement) ではまだなかった。為替契約の二面的性格から為替手形は、ある時は隔地間の資金移転のために、またある時は信用供与のために利用された。もちろん、どの場合も当事者の意向次第ではあつたが。

為替契約の完全な形は、四人の当事者の存在を前提とし、うち二人は契約の締結に、他の二人は別の場所での契約の執行に関係していた。これら四名の当事者は、通常、為替手形の文言の中に記載されていた。すなわち、(一) 為替手形を振出し、売却し、資金をその地で入手する借り手、すなわち、為替での貨幣の受取人、(俣) *preneur* (俣) *tomador* (俣) *Valutaneher* または *Wechselnehmer*、(二) 為替とひきかえに貨幣を与える為替での貸し手 (俣) *dator* (俣) *ddador* (俣) *Valutageber* または *Wechselnehmer*、(三) 手形振宛人、すなわち手形支払人 (*lire ou payeur*)、(四) 手形が支払われる受取人 (*bénéficiaire*)。誤解を避けるために記しておくが、中世においては借り手 *preneur* という言葉は、いつも手形振出人 (*tireur*) を意味していたのであつて、為替契約とのあらゆる絆を失いはじめた十七世紀になつてから使われるようになった用語である手形代金受取人 (*bénéficiaire*) を指さなかった。

一三九五年十一月四日、パリからジェノヴァ (*Grenova*) あてに振出されたつぎの為替手形を例証として提示しよう。

† Al nome di Dio a dì 4 di Novembre 1395.

Paghate per questa prima lettera al'usanza a Giorgio Doria, figlio di Domenico, fiorini ottocientoventisette s. diciasette a oro, cioè fiorini 827 s. 17 a oro, son per franchi 847 s. 3 a oro, n'aviamo auti da Giovanni Pichamiglio a 2 1/3 per ceto, a noi vantaggio, e ponete a nostro conto. Cristo vi guardi.

(別の筆跡) Accettata a dì 26 di Novembre 1395.

(20)

(裏面) Franciesho di Marcho e Andrea di Bonanno e compagni in Genova.

この文言によれば、つぎの四名がこの契約に登場しており、為替手形の中に明記されている。(一) サルヴェストロ・マンニニー(パリ在住)、手形振出人 (prenditori)、(二) ショバンニ・ピカミリーオ(同じくパリ在住)、為替での貸し手 (datore)、(三) ジェノヴァのジョルジオ・ツリア、手形代金受取人 (beneficiaire)、(四) 同じくジェノヴァ在住のフランチェスコ・ディ・マルコ&アンドレア・ディ・ボナンノ商会、支払人 (payeurs)。(★訳注)

注(一) Alonzo-M. Hamelin, Un traité de morale économique : le « Tractatus de usuris » de Maître Alexandre d'Alexandrie, Louvain, 1962, p. 133, no. 30. 一人の例外もなく、すべてのスコラ学者は『金利』を貸付から直接生じるあらゆる収益と定義している。教会法によれば、元金を超えるすべての部分は『金利』である (Corpus juris canonici, Décret de Gratien, canon Perique, Causa XIV, qu. 3. c. 3)。インノセント四世 (Innocent IV, 1243-1254年) は『教皇令集注解』にならび、『金利』を貸付から取りたてられたか、あるいは受けとられたあらゆる収益と定義している (In quantum decretalium, rubr. 19, cap 1, no. 1)。実際、これら定義のすべては同じ事である。

(2) たとえば、フランシスコ会修道士 Juan de Medina は「貸付そのもののなごり」には、『金利』はありえないと説明して、*unde ubi non est mutuum, usura locum habere non potest*。J. de Medina, De Poenitentia, Restitutio et Contractibus, 2<sup>e</sup> éd. Ingolstadt, 1581, t. II (Codex de rebus per usuram acquisitis, qu. 1), p. 250 F. 上の文に關してスコラ学者は一致しているの、例としてのみメディアナを引用しておく。

(3) Raymond de Roover, L'évolution de la lettre de change (XIV<sup>e</sup> - XVIII<sup>e</sup> siècles), Paris, S.E.V.P.E.N., 1953, p. 19 et passim (Ecole pratique des Hautes Etudes, 6<sup>e</sup> section, collection, « Affaires et Gens d'Affaires » no. 4.)

- (4) Richard Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger*, 2<sup>e</sup> ed., 1922, I, p.66.
- (5) Hamelin, op. cit., p.181, no 137. cf. Raymond de Roover, "Les doctrines économiques des scolastiques : à propos du traité sur l'usure d'Alexandre Lombard," (*Revue d'histoire ecclésiastique*, LIX, 1964, p.854-866)
- (6) Raymond de Roover, "Le contrat change depuis la fin du XIII<sup>e</sup> siècle jusqu'au début du XVII<sup>e</sup>," (*Revue belge de philologie et d'histoire*, XXV, 1946-1947, p.119)
- (7) W・ハンデマン (Wilhelm Endemann) は彼の大著 *Studien in der romanisch-kanonistischen Wirtschafts und Rechtslehre*, Berlin, 1874-1888, 2 tomes. に於いて、最初には為替手形が主に信用手段であったという事実を主張した。この説は商法史の大家、L・ゴールドシュミット (Levin Goldschmidt) の激しい批判にさらされた。彼は為替手形の中にあくまにも支払手段しか見ようとせず、『徴利』に関する教会の教義のあらゆる影響を否定するのになつた (L. Goldschmidt, *Universalgeschichte des Handelsrechts*, Stuttgart, 1891, p.140-141)。そのなかで、ハンデマンを擁護する A・シュタウプ (Adolf Schaub) や R・コーレンベルグとの間では辛辣な論争をもちあつた (R. Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger*, I, p.32)。ゴールドシュミットが誤りであることは明白である。cf. André-E. Sayous, "L'Histoire universelle de Droit commercial de Levin Goldschmidt et les méthodes commerciales des pays chrétiens de la Méditerranée aux XII<sup>e</sup> et XIII<sup>e</sup> siècles," (*Annales de Droit commercial français, étranger et international*, XL, 1931, p.199-217 et p.309-322, 特に p.316) しかしながら、誤謬や偏見がなかなか消え去らないように、このゴールドシュミットの主張は、いまなお支持者を得ているのである。とはいへ、H・ラペール (Henri Lapeyre) が我々の見解に完全に一致しており、W・エンデマンの炯眼に進んで敬意を表していることを記しておこう。ただし、エンデマンがもつぱら Raphaël de Turri や Sigismond Scaccia のような十六、七世紀の決疑論者やセラリストの著書を利用したことは咎められよう。彼等と同様、エンデマンは法学者として論議しており、貨幣市場の分析やメカニズムをほとんど顧みるこゝがなかった。
- (8) プラト・ダチーニ文書館 No 1161。左に為替手形文言の邦訳を示しておく

\* (訳注) 手形に明記された四名の関係を図示すれば、左図のようになる。①②③の日付は、各々、一三九五一年十一月四日、十一月二十六日、一月四日 (パリ・ジェノヴァ間ユーザンス二ヶ月) である。

神の御名により 1395年11月4日

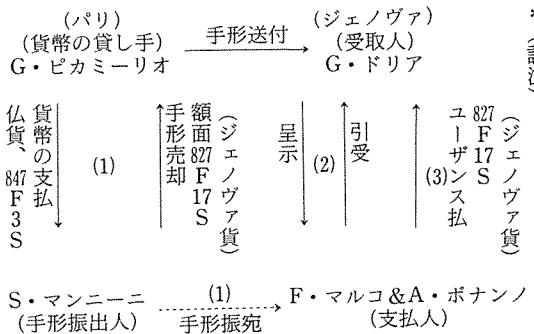
このユーザンス払い為替手形第一号にて、ドミニクの息子、ジオルジョ・ドリアに金貨827フリオリノ17ソルダを支払われたし、この金額はジヨベンニ・ピカミーリオから受け取った金貨847フラン3スーの価額にして、相場は、当方に2⅓%有利（フリオリノ2⅓%高……訳者）  
 当方勘定に借方記入されたし  
 神の御加護を

サルヴェストロ・マンニーニ商會  
 パリより挨拶を贈る

(別の筆跡で) 1395年11月26日 引受

(裏面に) フランチェスコ・デ・マルコ&アンブレア・ボナンノ商會  
 ジェノヴァにて。

\* (訳注)



相場、ジェノヴァ貨フィオリノ2⅓%高

今日、為替手形は割引かれているが、中世では割引は『微利』に関する教会の教義に抵触することから割引かれなかった。事実、手形割引は純粹、明白な『微利』であった。そこで、為替手形は、割引かれるかわりに為替相場できる価格で売買されていた。その結果、貨幣市場は割引率の騰落に制御されるかわりに、為替、つまり外国為替の相場に結びつけられていた。これこそその時代の貨幣市場と今日のそれとのきわめて重要な相違を形成していた。その上、利子のはっきりと明示されないで、逆に隠蔽されている事実によって分析が複雑にならざるをえないという現代に類似のない事態の前に歴史家は立たされている。かくて、近代の経済学者によって展開された諸理論は何らかの修

正なしには中世や近世の情況に適用されないのである。

貨幣市場は何時から存在したであろうか。正確な時期を与えるのは困難であるにしても、ジェノヴァの公証人の略注 (notules) によれば、その起源は恐らく十二世紀にまでさかのぼり、貨幣市場はシャンパーニュ大市の飛躍的發展とともに成長していったとおもわれる。こうした早い時代にはまだ為替手形は使われておらず、その先駆形態である *instrumentum ex causa cambii* すなわち、公証人作成するところの為替契約がその場所を占めていた。十二世紀以来、いくつかの例をジェノヴァの公証人、ジョバンニ・スクリーバの略注の中にみるが、一二〇〇年以降ともなるとその数も増えてくる。<sup>(10)</sup> 一般に債務者は、ジェノヴァである金額を受け取ったことを認め、シャンパーニュ大市か、あるいは例えばミラノ (Milano, Milan) やピアツェンツァ (Piacenza, Plaisance) といった別のところで、同額の返済を約束していた。<sup>(11)</sup> 時には為替の価格、つまり為替相場は明示されているか、もしくは契約の中に明記されている数字の助けをかりて簡単に計算されうる。しかし、この種の手がかりの一切を欠いていることもしばしばである。数多くの契約は、一六世紀に流行った *cambio con la ritorsa* (戻し為替を伴う為替契約)<sup>(12)</sup> や *cambi con continuazioni* (相落手形、書合手形、あるいは騎乗手形)<sup>(13)</sup> を示す為替と戻し為替の操作にすでにかかわっている。そこで、間もなく神学者達はこれらの契約が偽装された貸付でないかという疑惑をいだくようになる。

ジェノヴァの公証人の略注の中に、とりわけシシリアや非キリスト教国との数多くの海上為替契約 (*contrat de change maritime*) もまた見られる。<sup>(14)</sup> これらの契約は、貸付の返済が船舶あるいは積荷の無事な帰港にかかっている点で通常の為替となる。海上為替契約においては為替相場は、ただ利子だけでなく、予測しえない危険のための補償までもひそかに含んでいた。海上為替の人氣は恐らく、冒險貸借契約を禁じた教皇令 *«Naviganti»* の発布のためであろう。しかし、この点は議論のあるところだ。なぜなら、この有名な教皇令発布の一二三四年以前にも海上為替の実例がみられるからである。



ジェノヴァ、シャンパーニュ大市間では常に為替相場は、ツウルノア貨のスーに等しいプロヴァン貨のスーを基準に、ジェノヴァのデナリ貨の変数で決められていた。スーの相場は通常、ジェノヴァでよりもシャンパーニュ大市の方が高かった。その結果、自動的に資金の貸し手に収益が与えられることになったが、このことこそ利子が為替相場の中に隠されていた明白な証拠であつた。モラリストがこの事実には気づかないはずはなかつた。そこで彼等はまず、ジェノヴァ、シャンパーニュ大市間の為替を偽装された貸付と批判したのである。<sup>(15)</sup>この厳しさはアレッサンドロ・ロンバルド（一三二四年没）が出て、為替契約が一種の *permutatio* つまり貨幣の転換であつて、貸付 (*mutuum*) でないという教義を広め、はじめて緩められた。<sup>(16)</sup>教会にとつて法皇庁の資金移送に銀行家達を必要としたので、モラリストは、『高利』貸を糾弾する宗規上の取締から銀行家を目こぼしさせるこの見解をすばやく採用した。以降、為替契約の範囲内で銀行業の自由な発展が保障されたのである。

ジェノヴァの一連の公正証書の検討から、我々はジェノヴァ、シャンパーニュ大市間の為替相場が断えず変動しているわけではなく、数か月、否、数年にもわたつて不変であつたことを知る。<sup>(17)</sup>この予想もしなかつた現象をどのように説明するのか。まず考えられることは度々契約が予め正貨での決済を決めていたことで、そのため相場は貨幣改鑄に影響されなかつた。ついで、十二、十三世紀、シャンパーニュ大市にイタリア人が持ち込んだ香辛料やその他の奢侈品の価額に見合つたフランドルやブラバン地方の大量の毛織物輸出のおかげでイタリアと北方ヨーロッパの貿易収支が恐らく均衡のとれた状態にあつたからであらう。そして、この均衡が貨幣市場の安定に好ましい影響を与えていたと思われる。最後にその当時、貨幣取引を牛耳っていたピアツェンツァやシエナ (*Siena*) のマーチャント・バンカーは、資金の移転よりもむしろ信用供与や利付貸付の偽装に為替契約を利用していたとおもわれるが、このため彼等はジェノヴァとシャンパーニュ大市におけるプロヴァン貨のスーの為替相場のひらきに対するよりはるかにわずかしかな相場の水準に対して関心を示さなかつた。この答えは仮説にすぎないが、この問題のより徹底した研究があらわれる

までは意味があるとおもわれるので示しておこう。

- 注(9) 為替手形の先駆形態である為替契約証書 (*instrumentum ex causa cambii*) に関する R. de Roover, *L'évolution*, chap. I, p.23~42. 参照。この問題については同書文獻目録一六四~一六頁に挙げられている André-E. Sayous などの Ad. Schaubé の多数の論文をも参照されるべきをおすすめる。
- (10) Mario Chiandano & Martia Moresco, ed., *Il cartolare di Giovanni Scriba*, Turin, 1935, II, p.80, no.970, p.129, no.1060.
- (11) M. W. Hall-Cole, H. G. Krueger, R. G. Reinert & R. L. Reynolds, ed. *Giovanni di Guiberto (1200~1211)*, Torino, 1939, I, p.28, nos.61, 62; p.39, no.81, p.152, no.304; p.215, no.454; p.251, no.542; p.409, nos.882, 883 et passim. 聖三〇四の契約はジェノヴァ貨十二リブラ (*libra*) の前貨と、ルカ貨二十一・五リブラの返済を予め決めてゐる。その資料ではジェノヴァ貨のインレディ (*solidi*) はルカ貨二十一・五デナリ (*denari*) であった。No.八八二の契約ではジェノヴァ貨一ソルディは利子も含め、パヴィア (*Pavia*) 貨一九デナリであった。しかし、No.八八三の契約は相場を明示していない。
- (12) 例えは以下を参照。Renée Doehaerd, *Les relations commerciales entre Gènes, la Belgique et l'Outremont*. Rome-Bruxelles, 1941, II, p.418~420, no.775, et no.776. 聖ヤコブの契約はズルトの諸藩に関する。R. de Roover, *L'évolution*, p.32~33.
- (13) Doehaerd, *Relations*, II, p.63, no.131. 一二〇一年から三年四月三日の契約。参照。債権者 Beltramo Bertaldo は銀行家と自称しているが、最悪の高利貸である。
- (14) *Il cartolare di Giovanni Scriba*, I, p.45, no.84; p.62~63, no.119; p.117, no.219; p.129, no.238 et passim. 参照。ルカの契約はすべて航海に関する教皇や *Naviganti* 以前のものが多く、海上為替に関する以下を参照。R. de Roover, "The *Cambium Maritimum*" *Contract According to the Genoese Notarial Records of the XIIIth and XIIIth Centuries*, (*Explorations in Economic History*, VII, 1969, p.15~33)
- (15) Godtfroid de Trani (一二四五年没) 'オスティア (Ostia) の枢機卿 Henri de Suse (一二三一年没) 'イストラノー (Istria) ノーロスラヴィア北西端' ヴェネチア対岸地方一記者) の *Monaldo de Capo* (一二七八年没) の取った態度がなければならない。R. de Roover, *L'évolution*, p.185~186, 187, *Monaldo* 等 *Summa perutilis atque aurea* の著者である。
- (16) Alexandre Lombard, *Tractatus de usuris*, p.182, no.140. 聖ベネディクトの著者である *cambium* (cambium) を売買 (*emptio venditio*)

とみなし、それが貸付につかわれないのであれば、問題はないとした。

- (17) この問題に注意を向けさせてくれたのは故 R・レイルズ (Robert L. Reynolds) 教授である。一二〇〇年、シャンパーニュ大市からジェノヴァへの戻し為替の相場は、ジェノヴァ貨一ソルディ＝プロヴァン貨十六デナリであったが、この相場は一二四八年においても不変であった (Doehaert, Relations, II, p.57, no.118, p.300-301, no.570)。相場が十八デナリに騰貴したのはやっと、一二五〇年になってからで、五年には二十デナリになっている (ibid., p.331, no.620 ; p.359, no.682)。一二五二年、ジェノヴァからシャンパーニュ大市への為替相場は、ジェノヴァ貨一ソルディ＝プロヴァン貨十六・六デナリに落着いた (ibid., p.402, no.750)。

ブオンシニョーリ商会 (la Grande Table des Buonsignori) のようなシエナやピアツェンツァの巨大マーチャント・バンカーは、早や一三〇〇年以前からパリに恒常的支店をもつようになっており、彼等の代理人は恐らくそこから近くにあるシャンパーニュ大市に出向いていたであろう。<sup>(18)</sup> 支店設置は明きらかに大市取引の中心をパリに転換させる傾向をもった。シャンパーニュ大市が商品取引の大いなる減退をみながらも、なおしばらく西ヨーロッパの手形交換所でありつづけていたものの、この転換の流れは、十四世紀初頭、危機的状況に陥りはじめたシャンパーニュ大市の衰退とともに加速された。この変化はパリだけでなく、イタリアの商会が同様に支店をひらいているブルージュ (Brugge) やロンドンをも利することになった。

同時に 'instrumentum ex causa cambii' すなわち公正証書形式の為替契約は恐らく、甚だ冗長で、やっかいな証書であったために人気を失い、為替手形に、すなわち横長の小さな紙片に書かれ、短い書式で作成された簡単な書翰に取ってかわられ、やがて手形の書式も画一化され、法津上の意味をもつようになる。過渡期には時として支払人を名宛人とし、現金化のために資金の貸し手 (donneur すなわち bailleur) に手渡される書翰形式の公正証書が作成された。<sup>(19)</sup> しかし、公正証書の原本そのものを失念するのはやはり軽率であろう。すべて同等の証拠能力を有する複製が

容易に作成されうる幾枚かの為替手形に原本は付されないものである。その上、商人達はどの為替手形にも数枚の複製(第一号手形、第二号手形、さらには第三号手形さえも)を作成し、それらを別々の飛脚で振宛地に発送する警戒措置をすぐにとつた。この慣行は完全に消滅してはおらず、今日でさえも、もし第一号手形が郵送中や受取人の手落ちから紛失した際、手形名宛人は第二号手形の呈示に対し有効に支払うことができるというやり方がおこなわれている。中世為替手形は支払指圖書(*ordre de paiement*)であり、引受けられてはじめて名宛人の支払約束証となつたのである。為替手形は割引かれず、流通性もたないにもかかわらず、非常に大きな弾力性をもつた信用と為替の手段(*instrument de crédit et de transfert*)であり、同時に国際的、あるいは隔地間支払を決済するための正貨や地金の輸送を、どの程度か明言できないまでも不要にし、貨幣代替機能を果していた。

さきにのべたシャンパーニュ大都市の消滅は、ブルージュ、ロンドン、パリを銀行所在地(*place bancaire*)に上昇させることで分権的流れをもたらしした。中世において銀行業や両替商所在地は組織された貨幣市場をもち、各地の為替相場が規則的に建てられている商業中心地と定義することができる。一四、五世紀、すべてのイタリアの主要都市はすでにこの機能を果していた。すなわち、ボローニャ(*Bologna*)、フィレンツェ(*Firenze*)、ジェノヴァ、ルカ(*Lucca*)、ナポリ(*Napoli*)、パレルモ(*Pelmo*)、ピサ(*Pisa*)、ローマ、シエナ、ヴェネチア(*Venezia*)。ただローマ法皇庁(*en cour de Rome*)の所在地は定まつておらず、ローマにあるのは法皇がそこに滞在されている時だけであつた。それ以外の時は法皇庁は、法皇の巡幸につれて半島を移動した。かくして、マルティヌス五世(*Martin V*)が一四一九〜二〇年と一四三四〜三七年、さらにエウゲニウス四世(*Eugène IV*)が一四三九〜四三年、フィレンツェに滞在されていた時、フィレンツェの銀行区域がすぐ近くのメルカート・ヌオヴァ(新市場広場 *Mercato Nuovo*)の周りに決められてあつたのに、ローマ法皇庁(*in corte di Roma*)所在地は、サンタ・マリア・ノヴェラ広場(*Piazza Santa Maria Novella*)にすえられ、法皇はドミニク教団の修道僧達が住んでいた僧院にその居室をもつていた。ア

ルプスの北では為替相場の建つ都市の数ははるかに少なく、フランスではアヴィニオン (Avignon)、モンペリエ (Montpellier)、パリ、フランドルのブルージュ、イングランドのロンドン、アラゴン王国領土内のバルセロナ (Barcelona)、マヨルカ島パルマ (Palma)、ヴァレンシア (Valencia) 等であった。イタリア商人の書翰集の中に示されている為替相場によつて一四二九年以来、貨幣市場の存在が確認されているセヴィリヤ (Sevilla) も恐らく、このリストに加えねばならないであろう。<sup>(20)</sup> コンスタンチノープルも一四五三年までそこに出向いていたジェノヴァ人やヴェネチア人のためだけのものであるが、為替が建つ都市であつた。<sup>(21)</sup> あらゆる都市でイタリア人は主要な銀行家、あるいは両替商であり、そして、はるか後方からカタロニア人が彼等の後を追つていた。

ライン河の彼方、中央ヨーロッパやスカンジナビアには銀行所在地は存在しなかつた。なぜなら、恐らくこれらの国で行われていた相対的に遅れた商業方法が同様な発展を相容れなかつたからであろう。リュubeck (Lübeck) を銀行所在地になさんとしたフィレンツェの試みは、メジチ家の支援にもかかわらず右にのべた理由やバルチック海へのイタリア人の侵入と独占の喪失を恐れたハンザ同盟の組織的反対のため全くの不成功に終つた。<sup>(22)</sup> そのかわりゲルマン世界にあるとはいえ、一四一四―一八年のコンスタンツ (Konstanz) や一四二二―四三年のバーゼル (Basel) は、改革大公会議が開催されていた期間だけ一時、銀行所在地であつた。これは教会のこれら大公会議によつて行われる資金移動の大いさを示している。<sup>(23)</sup>

パリは一四世紀中、銀行所在地としての地位を守つていたが、シャルル六世 (Charles VI. 1380―1422) 治世下で起つた災難と、それにつづく一四二二―三七年の破壊のかぎりを尽くしたイングランドによる占領のため、一四〇〇年直後その地位を失つた。<sup>(24)</sup> パリの衰退で生れた空白は、ジュネーヴ (Genève) の四つの大市によつてうずめられた。ジュネーヴはサヴォイ候を宗主といただく司教都市であり、南ドイツからスペインへ、ブルゴーニュからイタリアに通じる道の十字路にあたるという地の利を得ていた。一四六六年頃、ルイ十一世 (Louis XI. 1461―83) の巧みな策略で

大市はジュネーヴからリヨンに移り、以降、リヨン大市は、フランスの中枢的銀行所在地として、スペイン王位継承戦争においてサミュエル・ベルナル (Samuel Bernard) の策略でリヨン決済《les paiements de Lyon》が消滅するにいたるまでその地位に踏みとどまっていた。<sup>(25)</sup>

銀行所在地のすべてが等しく重要であったわけではない。パリやロンドン<sup>(26)</sup>はブルージュの軌道を回る衛星にすぎなかった。とりわけ、パリはブルージュに完全に依存しており、ブルージュで起るあらゆる動きはすぐさまパリに影響した。事実、パリ在住のマーチャント・バンカーは、イタリアのコレス先に送る書翰の中にパリで建てられた相場のほかに、しばしばブルージュで建てられた相場の最新情報を書き添えていた。<sup>(28)</sup> 同時にまたこの通信はブルージュ、パリ間にある連帯性をもほのめかしている。

銀行所在地のすべてが相互に規則的な関係を結んでいたのではない。たとえば、パリは一四〇〇年頃、ブルージュ、ジェノヴァ、モンペリエ、ピサ、ヴェネチアの為替相場だけを建てており、おそらくフランスの王やブルゴーニュ侯の金融業者であった幾人かのルカの大銀行が存在したことから時おりルカあての相場も建てられた。<sup>(29)</sup> しかし、パリはバルセロナまたはロンドンとも直接、関係をもっていなかった。そこでバルセロナに送金するにはモンペリエを経由せねばならず、ロンドンに貨幣を送るのにもつとも利用される方法は、ブルージュの銀行家宛に為替を組むことであった。ジャン二世 (Jean II) がイングランドに拘禁された時、パリは、送金のために多分イングランドの司教の送金の相手方であったアヴィニオンの仲介をつかったのである。<sup>(30)</sup>

フランчесコ・ダチーニの通信によれば、一四世紀末頃のロndonはブルージュとジェノヴァとしか直接、規則的な関係をもっていなかった。それからしばらくしてロンバード街でヴェネチアのドウカート貨の相場も建てられるようになった。他方、ブルージュは広範なコレス網をもっており、一四〇〇年頃のブルージュ取引所はバルセロナ、ジェノヴァ、ロンドン、パリ、ヴェネチアあての為替相場を建てていた。つづいてフィレンツェがこのリストに

加えられることになった。

為替手形の回路は自明のことだが、その基礎となる貿易の流れがなければありえなかった。しかしながら、両者をきわめて密接に結びつけることには慎重でなければならぬ。ヴェネチアの商人がダマスカス (Damascus) との貿易を金融するためロンドン宛て手形を振出すことはないであろうか。<sup>(3)</sup> しかも、フランチェスコ・ディ・マルコ・ダチーニやメジチ銀行の通信は、為替手形取引がはつきりと商品取引をはるかに凌駕していたという印象をあたえているのである。<sup>(32)</sup> 実際、為替手形は信用の手段でもあったので、人々は、輸出入取引にまったくかわりのない外国との為替と戻し為替取引の方法で内国商業 (le commerce local) を金融することが可能であった。最後に、中世においては商業取引の限られた大いさからみて相対的にかなり大きかった教会の送金は、商業取引に根をもたない一方通行の支払であった。

注(18) その証拠として一二九二年の人頭税の名簿 (H. Gérard, Paris sous Philippe le Bel, Paris, 1837, p.1~4) やC・ユンニによって不完全な形ではあるが公表された一二九六、七、八、九、一三〇〇年のリスト (Camille Pitton, Les Lombards en France et à Paris, 1892, chap. 7, p.123~152) があげられよう。

(19) Roberto S. Lopez, La prima crisi della Banca di Genova (1250~1259), Milan, 1956, p.153 no.98 参照。

(20) Archivos del Reino de Valencia (マニレンシス女王文書館) ' Varios 557. のレフマレンスはグルノーブル大学教授H・ラベール氏によって親切にお知らせいただいた。

(21) ところが、地中海東部沿岸地方と活発な取引をもっていたにもかかわらず、マルセイユ (Marseille) は銀行所在地ではなかった。パリあて為替手形の取引をえもアヴィニオン経由か、やむえなければモンペリエ経由が好都合であった。Felix Reynaud, Histoire du commerce de Marseille de 1423 à 1480, Paris, 1951, p.877~881.

(22) イタリア人居住民団の中ちGherardo di Niccolò Buoni (ベシチ家の Giovanni di Bicci の息子 Piccarda Buoni のまたいふ) ' Lodovico Baglioni de Pérouse, Niccolò di Bernardo Bonsi, Francesco di Filippo Rucellai 等が居た。R. de Roover, The Rise and Decline of the Medici Bank, Cambridge (Mass., Etat-Unis), 1963, p.63~64, p.422n., K. W. Pauli, "Ueber

- die frühere Bedeutung Lübecks als Wechselplatz des Nordens", (Lübeckische Zustände im Mittelalter, Lübeck, 1872. II, p.98~171), Wilhelm Stieda, Hansisch-Venetianische Handelsbeziehungen im 15. Jahrhundert, Rostock, 1894, p.87~88, p.122. doc. no.1. 参照。
- (23) Ricci-Salutati の提案のサビコンスタンシスは為替の建て都市と記述されている。Antonia Borlandi, ed., Il manuale di mercatura di Saminiato de Ricci, Gênes, 1963, p.97. ヒーザニツゴツチ R. de Roover, Medici Bank, p.212~215 参照。
- (24) 裏題にかりたてた挿話のふたつは「發せし」四一八年五月二十九日に起つたロンネルマン銀行家に対する騒動の風物である。Joseph Calmette & Eugène Déprez, "La France et l'Angleterre en conflit", (Histoire du Moyen Age, éd., Gustave Giot, VII. 1 re partie, Paris, 1937, p.345~347)
- (25) Bruno Caizzi, "Ginerva e Lione: un episodio di guerra fredda economica nel XV secolo," (Cenobio, rivista mensile di cultura, Lugano, II, 1953, no.6, p.39~46) 参照。
- (26) Herbert Lüthy, La banque protestante en France de la Révocation de l'édit de Nantes à la Révolution, Paris, 1959, I, p.221~225. 参照。
- (27) Il manuale Ricci (Salutati), éd., A. Borlandi, p.141: 「ブルージュのデナリ相場はパリのそれはほとんど同一歩調をとりており、いづれも一方が良ければ、他方も良く、反対の場合も同様に変動する」……「E quasi a uno sengno vanno i denari di Brugia chon quelli di Parigi, che sempre quando migliora l'uno migliora l'altro e choxi per lo oposito」 Giovanni di Bernardo di Antonio da Uzzano, La pratica della mercatura, chap. 47 (Gian-Francesco Pagnini, Della Decima, Lisbonne-Lucques, 1766, IV, p.154) はこの点を確認している。こうした形で結ばれている都市は、このほか、バルセロナとヴァレンシア、モンペリエとアヴィニオンであった。
- (28) パリの代理人からフランチェスコ・ディ・マルコ・ダチーニ商会やその支店に書き送られた書翰の中にいくつもそうした例が見られる。
- (29) Pratica de Da Uzzano, chap. 35, p.140. しかしながらこの提要はパリ、ロンドン間の為替について語っており、この点でパリの代理人が与える資料と一致しない。
- (30) L. Douët-D'Arce, éd., Comptes de l'argenterie des rois de France au XIV<sup>e</sup> siècle, Paris, 1851, p.195, p.198. この送金についてはまずアヴィニオンからブルージュ、つぎにブルージュからロンドンという経路でなされ、送金額は英貨一三三七ポンド



ド一ハシリング四ペンスに等価の九五〇〇小フロリンにものぼっている。

- (25) Frederic C. Lane, Andrea Barbarigo, Merchant of Venice, 1418~1449, (The Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science, séries LXII, no.1), Baltimore, 1944, p.24~25. 著者L・レーンは利子が明らかに為替相場の中に隠蔽(enseveli)られていたことを認めている。

- (26) R. de Roover, L'évolution, p.63.

為替相場はどのように建てられるのか。この点に関する情報は商人がつかっていた提要の中に簡単に見出される。そのいくつかは印刷されているが、しかし他はいまだマニユスクリプトのままである。<sup>(26)</sup>ただ、これらの提要が我々に提供している資料は、慎重に、しかも事情をよく知って解釈されなければならない。

通常、ふたつの都市で互に取引される場合、一方の貨幣が他方の相場を示す基準となっていた (l'une donnait le certain et l'autre lui rendait l'incertain)。取引所用語で donner le certain とは為替相場が邦貨の一定金額を基準に外貨で建てられることを意味する。l'incertain の場合は反対に、為替相場は外貨の一定額と比べられる邦貨の変数で建てられる。かくして、今日、ポンドはパリでフランの為替相場を示す基準となっており (Londres donne le certain à Paris)、フランはポンドの一定額であらわされる変数である。ロンドンでもパリでも英貨ポンドの騰貴はイギリスに有利で、フランスに不利となり、したがって、ポンドの騰貴はフランス・フランの下落を示す。反対に、ポンドの平価切り下げはロンドンでもパリでも為替の下落をひきおこす。同じ規則が中世の為替に適用される。それゆえ完全にとりちがえることのないように細心の注意をして、為替相場の基準を示す貨幣 (le certain) とそうでない貨幣 (l'incertain) の区別をおこなうことが胆要である。しかし、これは最初の一步にすぎない。一層、複雑な事態が存在するのである。

いくつかの都市はいつも同じ方式で為替相場を建てていた。例えば、バルセロナはすべて他の都市の貨幣を相場の

基準にしていた (*donnat l'incertain*)。だから、わかりやすく問題もないが、しかし、この方式がどこでもつかわれるのではない。なかなしくブルージュではバルセロナとロンドンの二都市との為替において、為替相場はブルージュ貨 (二十二グロートのエク *écu*——訳者) を基準に建てられていたが (*donnat le certain*)、他の都市、パリおよびイタリヤ全都市との間では、為替相場はブルージュ貨ではなく、後者の貨幣を基準にしていた (*donnat l'incertain*)。したがって、ロンドンやバルセロナにおける相場の騰貴は一般にすべての他の相場の下落に対応しており、反対の場合は逆であった。為替相場は時にはヴェネチアのドゥカート貨のような現実の铸貨 (*monnaie réelle*) を基礎に建てられることもあれば、時にはジェノヴィーニ (ジェノヴァ古貨 *genovini*) の二十五ソルディに専制的に一致させられていたジェノヴァのフィオーリーノや、かなり以前に消滅してしまつたが、十五世紀、ブルージュで二十二グロートのフランドル貨に等しかったフィリップ・ヴァロア (*Philippe de Valois*) のエキュ貨のような計算貨幣 (*monnaie de compte*) を基礎に建てられることもあつた。フィレンツェ・ヴェネチア間の為替相場はヴェネチア計算貨幣ア・グロツソ・マンカーリラ (≡十ドゥカート金貨) あたりのフィレンツェ計算貨幣ア・フィオーリーノ (≡二十九分の二十フィオーリーノ金貨) の相場で建てられていた。<sup>\*</sup>十五世紀初頭、為替相場はヴェネチア計算貨幣ア・グロツソ一リラ≡十六リブラ・ア・フィオーリーニあたりを變動していた。

恐らく最も複雑なのはパリの場合であろう。パリでは右にのべた方式をとらず、為替相場は金貨フランとほぼ等価の外価との平価からの乖離幅、すなわちフランに有利 (*meglio*)、不利 (*peggio*) のパーセントで計算されていた。かくして、モンペリエとパリではフランとフランの為替相場が貨幣市場の状態に応じてパリのフランに有利 (*meglio*)、平価 (*pari*)、あるいは不利 (*peggio*) となつた。一四〇〇年頃、ヴェネチア・ドゥカート相場は、通常フランに *peggio* すなわちドゥカート高、フラン安であつた。換言すると、パリで支払つた一〇〇フランに対し、ヴェネチアでの受取額は一〇〇ドゥカートに足らなかつた。同様な事態は、ジェノヴァのフィオーリーノ相場が暴落しだし、

フランが peggio から meglio に変った、少なくとも一三九七年まではフィオリノ相場が平価以上であつたジェノヴァにあてはまる。相場がいまだジェノヴァに有利であつた一三九五年のさきに挙げた為替手形(一二二―一三頁参照―訳者)を例証としてみておこう。相場ははつきりと手形文言に記載されている。すなわちパリで受取つた八四七フラン三スーに対し、ジェノヴァで八二七フィオリノ十七ソルディしか返済しなくてもよく、振出人に $2\frac{1}{3}\%$ 有利。したがって、フィオリノ高、フラン安である。両金額の差がきつちり八二七フィオリノ十七ソルディの $2\frac{1}{3}\%$ になるから計算は正確である。パリはブルージュとの間でもフランとフランの為替相場を建てていた。ただ、ブルージュのフランは三三グロートに等しい計算貨幣であり、通常、相場はフランス・フランとでは平価を割つていた。ブルージュ・フランの為替相場はパリのフランス・フランを基準に建てられていた (Bruges domait l'incertain a Paris) ので、その結果、ブルージュ、パリ間の為替裁定取引や二十世紀の歴史家にとって、事態は甚だ込み入つていた。

パリでおこなわれていたこの方式は、恐らくツウルノワ貨のたび重なる重量、品位の変更からの影響を緩和せんとする目的をもつていた。そのことによる煩雑さを避けるため銀行家は安定した貨幣、フランで取引をおこなつていた。パリの状況は、為替相場がいかに建てられたかを知るだけでなく、その上、取引の基礎となる貨幣制度にも精通していなければならぬことを教えている。

若干の経済学者は商業上の非常にこまかい計算をまったく軽蔑しきつて<sup>(34)</sup>いる。しかし、そうであつてはならない。我々の考えるところでは彼等はあきらかにあやまつて<sup>(35)</sup>いる。これら事実の正確な把握こそ恐らく分析の第一歩であるばかりでなく、基本的なことでもあることを銘記すべきである。もし為替を建てる方式を見誤るならば、一層、大きな誤りの危険をおかすであらう。この種の最初のつまずきがその後の分析のすべてをもろくも破壊せしめ、完全にまちがつた、全く無価値な結論に導くことになりかねないのである<sup>(35)</sup>。

注(33) 一八世紀にGian-Francesco Pagniniが彼の著書 Della Decima, Lisbonne-Lucques, 1776S. t. III et IV, で公刊した Francesco

Balducci Pegolotti 著 Giovanni da Uzzano の提要がある。今では Pegolotti, *La pratica della mercatura*, éd. Allan Evans, Cambridge, Mass., Etats-Unis, 1936, 443p. の提要のより良い版がある。三番目の提要は Franco Bordini によつて公刊された *El libro di mercantantie et usanze de paesi* Turin, 1936, 212p. 彼の娘 (息子……訳者) は、一三九〇年頃 Saminiato de Ricci に編まれ、一四一八年、メジチ家のヴェネチア代理人で、後、メジチのパートナーに加わつた Antonio di Messer Francesco Salutati に補足された提要を公刊した。Pegolotti の提要は、シャンパーニュ大市が完全に衰微してしまう前の一三四年頃、書かれたもので、一四世紀前半の貴重な資料が含まれている。G. da Uzzano 自身は、まだ二〇歳であつた一四四〇年十一月八日に彼の著書を打ち切つたといへるが、資料がせいぜい一四二二年か、その数年後の所までのマニエスクリプトを書き写すこととせめてゐる。一四八一年に第一版が公刊された *El libro di mercantantie* の著者は、誤つて Giorgio di Lorenzo Charini とされているが、彼はたかだか一四五〇年頃のテキストをつかつて写したにすぎない。未公刊の提要のうち、特に、フイレンツェ国立文書館の写本 Cod. palatino, no. 601, Zibaldone di notizie utili ai mercantanti, を記してゐる。これはいくつかの銀行所在地における季節的変動の詳細な記述を与えてゐる。

一五世紀末、および一六世紀初頭に関つては Karl Otto Müller, *Welthandelsbräuche*, (1480-1540) (t. V. des Deutsche Handelsakten des Mittelalters und der Neuzeit, Stuttgart, 1934, 380P) に貴重な情報が見られる。一六世紀の初頭はまだ Pieter de Buck, *Der Cooplieden Handtboeck*, Gand, 1581, p.116-123. の概論が描写されてゐる。その一冊はアンтверプの Plantin 博物館に所蔵されてゐる。一五五〇年以降は、François Flory, *Tariffe ou table proportionnelle des changes en Anvers et ailleurs*, Anvers, 1572, の概論を手記として利用されてゐる。それによつては、その年々別の情報に記載されてゐる。参考にするべき他の提要は、M. Van Velden (別名 Campanus), *Fondament van de Wisselhandeling*, Amsterdam, 1629, によつてゐる。一六四十年、*'t Onderrecht des Wissels ende Wissel-Handeling*, van de Wisselhandeling, かの辞句の相違をいふに再版された。後者は不幸にも知られておらず、まったくの稀覯本となつており、私の知るかぎりでは全世界にわずか五冊しか残つておらず、アムステルダムに三冊 (Universiteits Bibliotheek 及 Economische-Historische Bibliotheek)、スウェーデンのウプサラ大学図書館に一冊、筆者私蔵の一六二九年版の一冊がある。Ernst Nathorst-Böös, "The Advantages of Banking", *A Presentation of three Manuscripts by Johan Palmstruch*, (Revue internationale d'histoire de la banque, I, 1968, p.307-322) 参照。Van Velden の論説は、部分、イタリアの提要 Giovanni Battista Zuchetta, *Prima parte della Arimmetica*, Brescia, 1600, 400p. なる著書を得てゐる。Zuchetta の情報も、同様、Lewes Roberts, *The*

Merchants' Mappe of Commerce, 1638, にも利用されている。一六〇〇年以降、提要の数は多数にのぼる。このノートがあまり冗長にならないように、つぎの人々の提要を挙げておこう。Giovanni Domenico Peri, Nicolas Barthe, Samuel Ricard, Jacques Le Moine de L'Espine, Issac Le Long 等の提要。言うまでもなく、以上の文献リストは完全なものから程遠い。

＊「周知のように、フィレンツェでは一二五三年（現在暦）一月、金貨その品位約二十四カラット、重量三・五三グラムを「フィオリノ」とするフィオリノ・ドーロ fiorino d'oro が創設され、これがフィレンツェの国際貿易上における決済貨幣に用いられていた。同金貨は都市当局の商業政策によって、その品位が維持されたので、この貨幣制度はながく安定した。しかし、ソルドやデナロといった小額貨幣は依然、銀貨でフィレンツェの庶民生活に用いられ、織元の資金支払手段として機能した。かくて、都市当局は資金政策や財政政策のため、ビッチョロ銀貨をその都度悪鑄した。——この結果、法定貨幣 1 lira = 20 soldi = 240 denari という貨幣体系は貨幣数量計算上の名目的な呼称単位にすぎず、金貨と銀貨間の比率は法定比率を乖離し、実勢相場で変動するにいたった。この乖離現象は商人の会計実務に大きな混乱をもたらした。フィレンツェの有力ギルドたるカリマールは一二七八年の混乱を防止するため、法定比率 1b.1 = d.240 にかかわらず、金貨一フィオリノ＝銀貨三四八デナリと規定した。この比率は法定比率（金貨一対銀貨一）に対し、金貨一対銀貨一・四五を意味し、銀貨の価値下落をギルド自身が是認したことになる。また、この比率は金貨に一・四五倍したものが銀貨額であることを示している。……………かくて、商人はすすんでカリマールの規定の主旨にそって、彼等の授受した金貨を上記比率で銀貨基準に換算し、これをイン・フィオリノとして帳簿上の金額欄に記載した。」「ところで、ヴェネチアの貨幣もフィレンツェ同様きわめて複雑であった。同地の流通貨幣には小型銀貨 piccolo, denarius, 大型銀貨 grosso, 金貨 ducato があり、計算貨幣としてア・グロッソ a grosso 『グロッソ風に』とりわけ、グロッソ・リラ・ベンカ viniziano grosso a lira manca 『不完全リラ風のグロッソ』が用いられた」（泉谷勝美「一四世紀トスカナにおける簿記の発達」一）（三）『大阪経済論集』一二三号、四九～五〇頁 一九七八年三月、一二五号、七六～七頁、同年九月）。

- (34) アインチャヒですらこのような見解をいっている。Paul Einzig, *The History of Foreign Exchange*, London, 1962, p.88, et 93～94. 小野朝男、村岡俊三訳『外国為替の歴史』、ダイヤモンド社 一九六五年 一〇二頁 一〇八～九頁。

- (35) こうした事例は Herman Van der Wee, "L'échec de la réforme monétaire de 1407 en Flandre vu par les marchands italiens de Bruges," (*Studi in onore di Amintore Fanfani*, Milan, 1962, III, p.577～589) にみられる。H・ヴァン・デル・ウェーは、「二二グロートのエクス貨が邦貨でなく外貨の計算貨幣であり、ブルージュ、バルセロナ間の為替相場がバルセロナ

貨を基準に建てられると誤解しているが、これはまったく反対である。その結果、彼の研究は受け容れられることのない結論を導いている。細心の注意を払わねばならないが、しかしまた、取りちがえやすいことを指摘しておこう。

今日、市場で建てられる為替相場は電信為替 (transfert télégraphique) 相場か、一覽払為替 (chèque bancaire payable à vue) 相場である。迅速な通信のため時間の要素は排除されているか、ほとんどゼロである。中世、近世は事情がまったく違っていた。そうでないはつきりとした約定がなければ、市場や取引所で建てられる相場は、商慣習で決められているユーザンス(伊 a uso, a usanza) 払為替手形に適用されていた。この時代の一般に認められていたユーザンスを知るには商人等がつかっていた提を調べなければならぬが、それらをいつも信用できるわけではなく、商人の会計帳簿のような別の資料も併せ確かめることが賢明である。<sup>36</sup> 例えば、ある提はパリからブルージュのユーザンス期間が一覽後十日(これはほとんど十五日になるであろうが)であったとのべているが、別のものでは一か月とになっている。今のところ我々はこの食い違いを解くに至っていない。実際と一致した慣行がどちらなのかを知るには恐らく、会計帳簿にたよる以外なからう。多分、ユーザンスは理論上は十五日であったが、実際は大部分の為替手形は二ユーザンス、すなわち一覽後一か月で支払われており、そして、ついにこの方式が大勢となったのではなからうか。

ユーザンスの期間は商慣習で決められており、長期間、時には一世紀あるいはそれ以上の期間不変であった。ユーザンス期間は距離に応じて変わったが、これは為替契約を正当化する神学者の議論につかわれた。にもかかわらず、彼等の理屈は距離とユーザンス期間の関係がかなり緩んでいたことからろくも崩れざるをえなかった。パリ、ジェノヴァ間のユーザンス期間は二か月であったが、パリからの手形がジェノヴァにとどくには二か月も必要ではなかった。真冬でも所要期間は平均、約三週間にすぎなかった。以上から我々は出来るかぎり速やかな資金の移転を行

うこととは別な事情が作用していたことをはっきりと知ることができるであろう。

中世、近世の貨幣市場は、確定日払外国為替手形市場とまさに一体となっていた。<sup>(37)</sup> 言うまでもなく為替手形のかたちをとって外国為替を取引する銀行家は、博愛家でもなければ、<sup>(38)</sup> 無料で貨幣を貸すつもりでもないものであって、取引から何らかの収益を引き出そうとしていたのである。かくして、利子が為替相場の中に巧妙に包み隠されていたことは意外なことでもない。この事実こそ神学者が何とも認められなかった点であり、さもなければすべての為替を『微利』として追放してしまわなければならなかったであろう。<sup>(39)</sup> だがモラリストは、市場が『今、手もとにない』貨幣『l'argent absent』よりも、『今ある』貨幣『l'argent present』をいつも高く評価していることを認めていた。別言すれば、手もとにある現金は隔地で入手しうる貨幣よりも高く評価されていた。<sup>(40)</sup> まさにそのとおりであるが、つまりこれは利子の存在を暗々裡に承認することではなからうか。証拠は唯、これひとつというわけではない。銀行家自身の会計帳簿、<sup>(41)</sup> 為替相場の基準となる通貨国での相場がそうでない通貨国での相場よりもほぼ常に高いという統計、さらには利子以外のすべての変動要因を捨象するならば、利子がいかに為替相場に影響するかを示す分析によっても利子の存在は立証される。すべてこれらの証拠は符号しており、裏付けられてもいる。そこで、もはや反論の余地がないこのテーマを一層展開し、論じることが意味がないだろう。今や、この点は大多数の経済史家によつて議論の余地がないものと認められている。

しかし過去と現在との重要な相違をはっきりとさせておこう。商業手形を割引く銀行家の収益は、割引が元本の百分率で算出されるという意味で事実上、確定であった。しかしながら、過去においてはこうではなかった。すなわちあるところで建てられた為替相場で為替手形を買った銀行家の収益は、『戻し為替』を組む (taire < ses retours >) <sup>(42)</sup> ことのできる相場、別言すれば、彼が入手したところの外国為替を邦貨に再転換をはかることのできる為替相場を前もって知らないことのため、確定していなかった。<sup>(43)</sup> 明らかに一切は近い将来の為替相場の予測しがたい変動にかかつてい

た。銀行家はなんとか相場の変動を正確に予測しようと試みていたが、彼等の予測がいつもあたるとはかぎらなかつた。もし為替が非常に不利な局面に変われば、銀行家は収益をうるどころか、損失をこうむることさえありえた。神学者はこのような場合の可能性を力説していたのである。なぜなら、彼等の定義によれば『金利』はあくまでも貸付から生じる『確実』な収益 (*un gain certain*) にあつたからである。だが、そのことを大げさに考えてはならない。ルーレットのゲームのように、銀行家は為替相場の中に隠された利子の存在そのものに守られていた。為替と結ばれている銀行業は投機的性格をもつたままではなかつたのである。

注(36) 特に以下を参照。Pegolotti, *ouvr. cit.*, (Evans, éd., op. cit., Pagnini, éd., op. cit., p.198~200) ; DA Uzzano, *ouvr. cit.* chap. VIII-IX, p.100~103. et *passim* ; El libro di mercatante, chap. CCVI, p.169~171 et *passim*.

(37) P・フインツェにも同じ見解をいだいており、このことは一八世紀末まであつてはまると記している (op. cit., p.123. 邦訳「四五頁」)。Cf. R. de Roover, *L'évolution*, p.138~139.

(38) この事実は一八九六年以来、R・エーレンベルによつて認められている。R. Ehrenberg, *Zeitalter der Fugger*, I, p.33. 残念ながらこの伝語版において、「利子は為替相場となつた」と間違つて表現されているが、「利子は為替相場の中に隠蔽されていた」と翻訳されるべきであつたろう。両者はまったく別の事柄である。R. Ehrenberg, *Le siècle des Fugger*, Paris, S. E. V. P. E. N., 1955, p.16)

(39) Dr. Navarrus (1493~1587) の名前がよく知られてゐた Martin de Azpilcueta の著書 'Comentario resolutorio de Cambios, éd. par Alberto Ullastres, José M. Perez Prendes y Luciano Peña, Madrid, 1965, chap. XIII, p.87~88, no.62. 参照。Cf. John T. Noonan Jr., *The Scholastic Analysis of Usury*, Cambridge, Mass., Harvard Un. Press, 1957, p.318~321. 筆者 (ド・ローヴァー) はこの文脈で *devantage* (より多く) という言葉が意味するところを問題にしている。我々の考えでは、これはただ、市場が邦貨にくらべ外貨を過小評価することを意味するにすぎない。

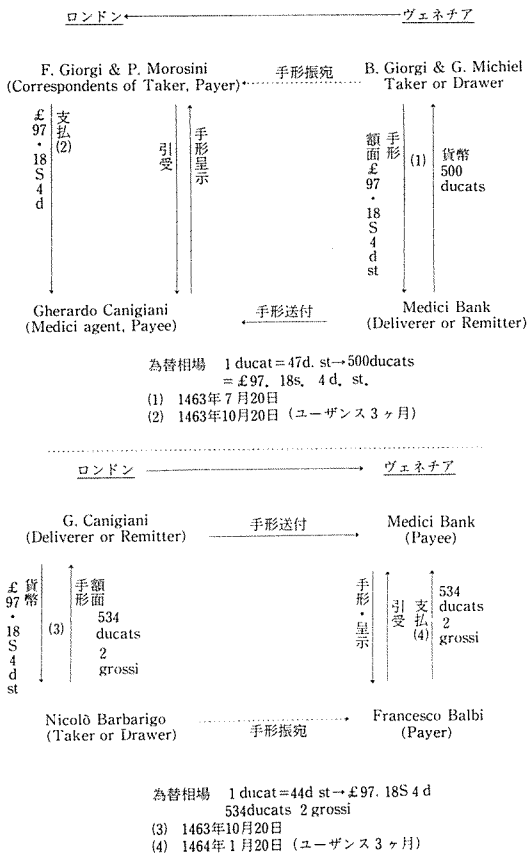
(40) ブルージュのメジナ銀行の元帳にもつき、証拠となる原文を伴つた例を参照。R. de Roover, *The Medici Bank, Its Organization, Management, Operations and Decline*, New York University press, 1948, p.82~85. Appendix. 6. の例は銀行家の収益の源泉が利子になく、為替にあつた当時のあり様を教えている。



(41) R. de Roover, *The Bruges Money Market Around 1400*, (*Verhandelungen Van de Kon. Vlaamse Academie Voor Wetenschappen, etc.*, *Klasee der Letteren*, no.63, Bruxelles, 1968, p.24~25, グラフ(一)。(二)これらのグラフは「ローナ」のエクイ貨の相場がほぼ「つねにフルージュ (place qui cotait le certain) における方が「バルセロナ (place qui cotait l'incertain) におけるよりも高かったことを示している。したがって、自動的に為替での貸し手が収益を得ることになっていた。

(42) R. de Roover, *L'évolution*, p.53~55, et passim, R. de Roover, *The Rise and Decline of the Medici Bank*, p.113~116, p.114に示されている図解。

\* 注(42)で指摘された図解はドゥ・ローヴァの主張の理解を助けるとおもわれるので引用し、説明しておこう。



メジチ銀行ヴェネチア支店は「ドゥカート」四七ペンスStの相場で「ポンド」手形を買い、「ドゥカート」四四ペンスStで「ポンド」を「ドゥカート」に再転換することで、五〇〇「ドゥカート」の六か月間の投資から三四「ドゥカート」二グロッシ (534ducats 2grossi = 500ducats) の収益を得た。ただ、図解では最初のヴェネチアからロンドンあての「ポンド」手形は三か月のユーザンス後、十月二〇日支払われ、同日、ヴェネチア向けに手形が組まれたことになっているが、実のところ最初の手形は不渡りとなり支払期日の二日後、公証人 William Slade によって拒絶証書が作成されている。かくして、商人の慣習にしたがい、手形金額受取人であった Cherardo Canigiani はメジチ銀行ヴェネチア支店を受取人、G. Giorgi & G. Michiel を支払人とする手形を振出し、ている。その場合の手形額面は、最も新しく建てられた相場「ドゥカート」四四ペンスStで計算された九七ポンド十八シリング四ペンスStプラス拒絶証書作成費用、手数料、その他費用等四シリング、計九八ポンド二シリング四ペンスStのヴェネチア貨五三五「ドゥカート」五グロッシであった。かくて、もとの貸り手 B. Giorgi & G. Michiel は五〇〇「ドゥカート」の六か月の借用で約三五「ドゥカート」(年利十四%)を支払ったことになる (R. de Roover, op. cit., p.111~114)。

- (43) R. de Roover, *Gresham on Foreign Exchange*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1949, p.313~317, Appendix. この補遺には「神学者や法学者」さらに提要の著者からの一連の引用がみられるが、彼等すべては為替取引の投機的、冒険的性格を力説している。

貨幣市場を語る人はどうしてもまた貨幣について語らなければならない。先ず為替は、邦貨でも外貨でも貨幣の重量、品位の変更にきわめて敏感であった。それらの変更は、そうした場合時には為替水準からの突然の激しい騰貴や下落をひき起した。ただし、通貨膨張、すなわち貨幣の貶値は、通貨収縮的である貨幣の改鑄、良貨への復帰ほどの混乱をひきおこさなかったようである。通貨収縮がつねに通貨膨張よりも困難な操作であるので為替はゆっくりとしか新しい事態に対応せず、銀行家達も成行きを見守る態度をとり、少なくとも『新』貨幣の首尾がはつきりするまではしばらく『旧』貨幣で為替相場を建てていた。<sup>(44)</sup> 銀行家はいかに行動すべきかを心得ており、めったに不意をつかれることもなかった。

経済学者の説明どおりならば、中世の為替相場はゲームのルールに従つて動き、平価を中心にして変動していなければならぬであらう。よし、そのとおりだとしよう。だが平価はいかに決まるのか。ほぼすべての列強が金本位制度を採用していた一九一四年以前なら平価の算出は容易で、平価をさぐりあてるにはふたつの貨幣単位の内在価値を比較すればそれで足りた。したがって、一ポンド・スターリングは理論的には二五・二〇フランス・フランと同じ金量を含んでいた。相場が取引所で一〇〇ベルギー・フラン＝一〇〇フランス・フランの時、ベルギー・フランは平価にあった。平価からの乖離はきわめてわずかで、必要があれば正貨や地金の現送ですばやく平価に戻された。しかし、中世では平価の決定自体が簡単な事柄ではなかった。なぜなら、貨幣制度が常に混沌とした状態にあったからである。それはまったくすずめ蜂の巣で、歴史家が手をつけるのに僻易するほどであった。

西ヨーロッパのいくつかの国、たとえば、フランスの貨幣制度は三貨制 (*trimétallique*) であり、流通には金貨、銀貨つまり白い貨幣 (*la monnaie blanche*) と、非常に低品位でその内在価値と比べかなり過大評価されていた銅貨 (*la monnaie noire*) があつた。フィレンツェやヴェネチアのような国では複本位制であり、金貨は銀行家や大商人が契約を結んだり、彼等の勘定を計算するためにつかわれ、銀貨、あるいはよりましなピッチョロ貨 (*moneta di piccioli*) は小売商業や市民の日常取引につかわれていた。さらにやっかいなことには貨幣鑄造税が鑄貨ごとに区々であつた。最後に、国家によるあるいは地方ごとの鑄貨発行のたびに外貨との換算率がたびたび改定されていた。こうした事情のもとですべての流通する貨幣のうちどれを基準にして平価の計算がなされるのであらうか。

為替の平価というこのやっかいな問題を議論の俎上にのせたのはイングランドの重商主義者であつた。彼等の言うところによればポンド・スターリングは、貧国イングランドの大いなる犠牲のうえにアントワープ取引所で過少評価されていた。ロンドン塔でポンド貨は平価決定のため試金、秤量されたが、はかられる貨幣ごとに得られた数値が異つていたため、一定の平価を確定できなかった<sup>45</sup>。その上、為替相場が重量も品位すらも等しくないフラン、フィオリ

ノ、ドゥカート間の人為的な任意の『平価 (伊 *pari*)』からの乖離幅のパーセントであらわされていた叙上のパリの例が示すように、中世では『平価』という言葉自体がすこぶる曖昧にしか受けとめられていなかった。したがってテクニカル・タームそのものが同じ意味をもっておらず、このことが生来誤解をまきちらし、分析を複雑にしがちであったとおもわれる。

平価について以上のようにのべたものの為替相場と貨幣の内価値との間には、一定の直接的関係が存在したと言えるであろう。<sup>(46)</sup> 貨幣の通用相場は、流通が公的に認められた金貨や銀貨の通用相場を定める貨幣法令によつてたびたび公定されていた。しかしながら、法令は流通鑄貨をしばしば過大、あるいは過小評価していたので、公定相場はまれにしか市場相場に一致しなかった。この現象を研究するにはその中で外国為替が演じる役割に注視しなければならぬであろう。具体的な例をあげてのべるならば、ブルージュ取引所でフィレンツェのフィオーリーノやヴェネチアのドゥカートの騰貴は、ただそれだけの孤立した事実にとどまっているのではなく、かならずフランドルで流通していた金貨 (しばしばフィオーリーノ金貨やドゥカート金貨の模造金貨も) の騰貴までもひきおこした。そのため、公定相場を維持せんとするむなししい努力がなされ、結局、遅かれ早かれ現実に追従せざるをえなくなった。外国で建つ相場に影響される外国為替市場はあらゆる統制からまぬがれていたので、為替業者や商人の不正行為を告発しても効果はなかった。経済界ではすべてが関連していることを思いおこさねばならない。

注(44) R. de Roover, *The Bruges Money Market*, p.39~41, 106, 133~134, 138. の例を参照。一連の改鑄の結果、一二九一年、二二  
ニグロートのエキュー貨はバルセロナ貨六s六dから九s六dにはねあがった。

(45) R. de Roover, *Gresham on Foreign Exchange*, p.129~131.

(46) R. de Roover, "Anvers comme marché monétaire au XVI siècle", (*Revue belge de philologie et d'Histoire*, XXXI, 1953, p.1031~1032)

貿易収支概念はイングランド重商主義者のもう一つの発明である。この概念は彼等の理論体系のまさに柱石である。<sup>(47)</sup>しかし、中世の銀行家がこの点をほとんど考慮することがなかったとすることは、貿易収支の不均衡、あるいは、もつと云えば、支払差額の不均衡が国際的決済の敏感な機構を混乱させることがなかったと言うに等しいであろう。事實はまったくこの逆である。一五世紀はまさに国際的決済機構の混乱によって特徴づけられる時代であった。

実際、イングランドの羊毛だけが北欧でイタリア商人がまとまって買付けていたほとんど唯一の産物であったので、北欧は、イタリアに対する収支赤字を支払うのにますます困難をきわめていたとおもわれる。とりわけフランドルはイタリアに対し逆調であった。通関統計がないので最善の指標は、恐らくピサを出航したフィレンツェのガレー船がまずオランダのスリュイス (Ecluse, Sluis) に向い、そこで荷降しした後、のこりの積荷を降し、その船倉にイングランドの羊毛を積み込むためにサザンプトン (Southampton) へと航海していたことであろう。<sup>(48)</sup>ジェノヴァのカラク船もまたスリュイスやゼーランドの停泊地への帰り荷をなかなか見つけることができなかった。<sup>(49)</sup>他方、ブルージュ在住のマーチャント・バンカーがバルセロナに持つ彼等の債権をイタリアあての債務の支払にあてていたことから、スペイン、カタロニア地方とフランドル間の貿易収支は、多分フランドルに順調であったとおもわれる。<sup>(50)</sup>ローマ法皇の送金は当然のことながらこの事態を一層悪化させていた。収支の逆調をまかなうため鑄造正貨の現送が行なわれた。例えばメジチ銀行のジュネーヴ支店は、毛織物の積荷の中に正貨を隠しイタリアに発送していた。<sup>(51)</sup>このますます悪化する困難な事態は、ついにほぼ一四六五年から一四九〇年頃までつづいた危機をひきおこすことになった。この危機がその経営のまずさも手伝ってメジチ銀行閉鎖の主な原因のひとつであった。ロレンツォ豪華王 (Laurent le Magnifique 1449~1492) 自身によって書かれた一四七九年の覚書の中で、彼はフランドルに八八〇〇〇ドゥカート以上も投資しながら、イングランドの羊毛で一二五〇〇ドゥカートしか回収していないとこぼしている。フランドルの

産物は問題にもならなかった。<sup>(52)</sup>

一五世紀の国際商業の輪郭はまだわずかしかられていない問題である。それゆえ、いくつかのバラバラの事実に基づいて一般化したり、より深い研究によつて究明し確かめられねばならない仮説以外のことを主張したりすることは危険である。

現在の研究段階においてはつぎの現象、すなわち貨幣市場に影響を与えた季節的変動についてはよく知られている。貨幣市場は緩慢 (*larghezza*) と逼迫 (*strettezza*) の時期を順に繰り返していた。この二つの言葉は、ブルージュやパリの代理店からフランチェスコ・ディ・マルコ・ダナーニ商会に送られてくる書翰に見られる数多くの例が示すように、たびたび銀行家のペンで書かれていた。<sup>(53)</sup> 一六世紀のシモン・ルイス (*Simon Ruiz*) あての手紙や商人がつかつていた提要の中に同じ表現 (*estrecheza, largueza*) が見られる。<sup>(54)</sup>

*Strettezza* という言葉は今日なら割引率の高騰に表現される貨幣市場の収縮を意味するであろう。しかし、中世では *strettezza* は、一方で為替相場の基準を示す通貨国での為替相場の高騰を、他方でその通貨を相場の基準とする他国での相場の低落をひき起こした。 *strettezza* とは反対に、 *larghezza* は前者では為替相場の低落を、後者では相場の高騰を生みだした。ところで *larghezza* は決して活況の兆を示すものではなかった。というのは、たびたび貨幣が安かったのは市場で貨幣供給が豊富であったからではなく、支払能力のある買手がいないため借り手や企業家に気に入る投資物件が見出されないがためであった。

*larghezza* と *strettezza* の交替は季節的性格をもっており、その規則的循環は商人がつかう提要の中に記述されている。<sup>(55)</sup> 銀行家もまたそのことをよく知っており、その動きを彼等の予測のためにつかっていた。例えばパリでは貨幣市場は六月後半のランディ (*Lendit*) の大市<sup>\*</sup>の期間や、十二月はじめの聖アンドレの大市の期間は一般に逼迫していた。モンペリエではパリはさておき、近くでおこなわれるペズナ (*pézenas*) やモンタニャック (*Montagnac*) の大市

の期間中、ツールーズ(Toulouse)やモンペリエからの毛織物商がツールーズやモンペリエ宛の手形の買い手(datori)となったがために貨幣は常に高かった。しかしながら、商人の提要求がいつも信用できるとはかぎらないし、また季節的変動の規則的循環が時にはいくつかの状況の急変によつて乱されたことをつけ加えておこう。

- 注(47) この問題に関するもっとも重要な資料は、恐らくフランシス・ソウルズ卿(Sir Francis Knowles)によつて起草された、一五六四年のイングリランド王立委員会報告であろう。報告書は、低地諸国でイングリランド毛織物の売れぬきの悪さがいかにポンド相場に不利に働き、売れぬきの良さがアントワープ取引所で行かたポンド為替相場の騰貴をひきおこすかを説明している。  
(Tudor Economic Documents, éd., R. H. Tawney et Eileen Power, Londres, 1924, III, p.346-359. Cf. R. de Roover, Gresham, op. cit., p.150-154).
- (48) R. de Roover, "La balance commerciale entre les Pays-Bas et l'Italie au XV<sup>e</sup> siècle", (Rev. belge de phil. et d'Hist., XXXVII, 1959, p.374-386.)
- (49) Jacques Heers, Gènes au XV<sup>e</sup> siècle, activité économique et problèmes sociaux, (Ecole pratique des Hautes Etudes, 6<sup>e</sup> section, <Affaires et gens d'affaires>, Paris, S. E. V. P. E. N., 1961, p.346 et 457-459.
- (50) R. de Roover, Bruges Money Market, op. cit., p.44-46.
- (51) 一五世紀における貴金属の移送回路については、いまだまったくわづかしか知られていないが、ジュネーヴ大市がその取引の中心であったことはほぼ確かである。<sup>9</sup> R. de Roover, Rise and Decline of the Medici Bank, p.123, 271.
- (52) R. de Roover, op. cit., p.349. 銀行のtransfer difficultiesの項に頁を参照。
- (53) R. de Roover, Money, Banking, and Credit in Mediaeval Bruges, Cambridge, Mass., The Mediaeval Academy of America, 1948, p.66; Id., Bruges Money Market, op. cit., p.37 et passim.
- (54) Henri Lapeyre, Une famille de marchands; les Ruiz, Paris, Armand Colin, 1955, p.301.
- (55) Da Uzzano, Pratica della mercatura, chap. 48, p.155-158; B. N. F. (フランス国立図書館) Cod. palat., No.601, f<sup>o</sup> 60<sup>r</sup>-79<sup>r</sup>; Zibaldone.

\* 中世パリ近郊のサン・ドニ (Saint-Denis) の原で行われた定期大市。

貨幣市場の構造は、十六世紀においても基本的に何ら変化しなかった。以前と同様、貨幣市場は外国為替市場に結びつけられたままであった。なぜなら、『徴利』に関する教会の教義がまだその影響を何ら失っていなかったからである。一五三〇年にすらアントワープのスペイン人居留民団は、若干の為替取引の合法性に関してソルボンヌ大学神学部にお問い合わせを決めている。<sup>(56)</sup> スペイン、メディナ・デル・カンポ (Medina del Campo) の大マーチャント・バンカー、シモン・ルイスはこの点非常に小心で、非合法な為替取引に手を染めていないことを自慢しているが、同じことはその一五〇年ばかり前のフランチェスコ・ディ・マルコ・ダチーニについても言える。銀行家自身の精神状態はまったく変わっていなかったのである。

一六世紀を通じて合法的為替と非合法的為替に関して神学上の論争が激しくたたかわされた。法皇ピオ五世 (Pio V. 1566～1572) は問題の解決に大いに努め、一五七一年一月二八日、資金移転を何ら意図することなく、資金供与者がただ信用取引から利益を引きださんとする以外の目的をもたないあらゆる乾燥為替や仮空為替を非難する教書 *In Eam* を公布することによって論争の範囲を限定しようとした。<sup>(57)</sup> 教書は期待された効果をもたなかった。人の目をくらませるため銀行家はただ形式的ないくつかの小さな調整をなした<sup>(58)</sup> が、ピオ五世の教書に一致するようにこれら新たな慣行を正当化せんとする好意的な神学者を何なく見出すことができた。<sup>(59)</sup> その結果、論争は静まるどころか、かえって活気づいた。一七世紀はじめに論争は新たに激しい調子を帯びえし、論争がおさまったのは法皇ブノワ十四世 (Benoît XIV 1740～1748) 退位の後であった。<sup>(60)</sup>

しかし、一六世紀になると為替取引量は著しく増大した。以前にもまして為替手形は、国際的決済を遂行し、正貨の現送を排除するためのますます重要な手段となった。支払手段としてよりも信用手段としての役割が重きをなしていた。だが北欧では為替手形は、ライバルに約束手形の先駆形態である債務証書 (*cédule obligatoire*) をもち、それはアントワープやベルゲン (Bergen-op-Zoom) の大市に度々出向くとりわけイングランドの商人に選好されていた。<sup>(61)</sup>



銀行所在地数は一六世紀に増加したが、他方、以前銀行所在地であつたいくつかの都市が新たな情況にめぐまれた他の都市にその地位をゆずつた。<sup>(61)</sup>もつとも有名なのはブルージュの例である。ブルージュは一五〇〇年頃、急速に衰微し、その地位をアントワープにゆずりわたしている。そこでアントワープは一五三一年、取引所 (la Bourse) の堂々たる建物を落成した。アントワープ取引所はその後、ロンドン、アムステルダム、コペンハーゲン (Copenhagen) の取引所のモデルとなつた。もうひとつの同様な変化はイベリア半島で起つており、セヴィーリア、リスボン、カステイリヤ大市がバルセロナやマヨルカのパルマの相対的な衰退の恩恵に浴した。明らかにこれは国際商業 (grand commerce) の中枢の移動であつた。ただ、ヴァレンシアは首尾よくその地位を守りとおすことに成功した。<sup>(62)</sup>ライン河以東ではアウグスブルグ (Augsburg) とニュールンベルグ (Nürnberg) の町がフッガー家を先頭にその幾人かの市民の金融力のおかげで銀行所在地の地位にはいあがり、それほど困難もなくその地位にとどまることに成功した。北ドイツではドイツ・ハンザ同盟の時代おくれの商業方法の变革は緩慢で、ハンブルグに為替相場が建つようになるにはイングランド人が彼等の毛織物指定市場をエルベ河西岸のシュターデ (Stade) に移したあとの一五八七年まで待たねばならなかつた。フランスではルーアン (Rouen) と百年振りに復帰したパリが銀行所在地の列に加わることになつたが、それらは依然二流の地位に甘じており、リヨン大市に遠く及ばなかつた。<sup>(63)</sup>

注(59) J. A. Goris, *Etude sur colonies marchandes méridionales à Anvers de 1488 à 1567*, Louvain, 1925, p.507-545. 上の神学的意見書 (consultatio theologica) はソルボンヌの一五名の学者からなる委員会によつて署名されており、そのうち、熱血漢の Noël Beda、ラブレール (Rabelais) の物笑いになつた銜学者の Jean Mair だけがその名を後の世に知られている。スペイン人、なかんずくシモン・ルイスは『微利』に関しイタリア人よりも確かに小心であつた (Lapeyre, *Les Ruiz*, p.133-137 参照)。ともかく、諸資料の示すところによれば、商人や銀行家は君臨する教会の戒律に決して無関心ではなく、良くも悪くもそれに従おうとしていたのである。

(57) R. de Roover, *L'évolution*, p.72-73, 80, 179 et passim. 一六世紀の為替理論の格好の説明は以下にもみられる。Lapeyre,

Les Ruiz, p.325〜335 参照。

- (58) 放任主義の決疑論者のひとつともらしい議論の一例は、ナポリ人 Marco Palescandolo (1542〜1622) の論説の中にみられる。Giovanni Cassandro, *Un trattato inedito e la dottrina dei cambi nel Cinquecento*, Naples, 1962, 176p. G. Cassandro の著書に対する筆者の書誌も参照 (Revue d'histoire du droit, XXXII, 1964, p.289〜291)。Palescandolo は、為替市場相場、すなわち公正な価格で契約されさえすれば、ピオ五世の教書 *In Eam* にはつきり非難された為替をも含め、すべての為替を承認せんと努めている。

- (59) 例えは法学者 Antonio Meranda と商人提要 II *Nagotiante* (Venise, 1707, 3<sup>e</sup> partie, p.75〜106) の著書 Giovanni Domenico Peri との間のうわべは隠やかだが棘の含んだ論争を見よ。

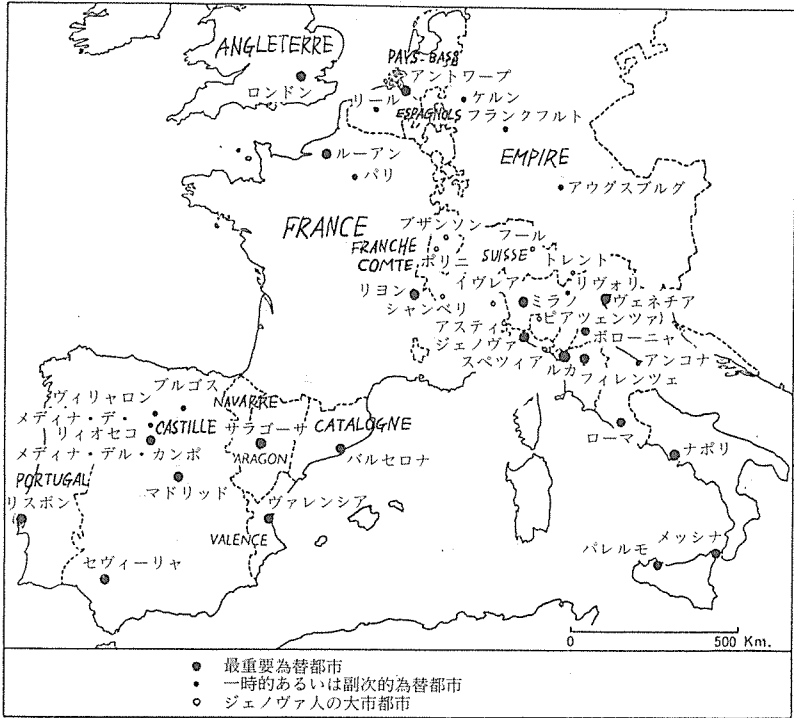
- (60) 債務証書をイギリス人は *bills of debt* と呼んでいる。それは度々持参人に支払われ、正式の手続きなしに転々流通してゐた。R. de Roover, *L'évolution*, p.96〜97, 110. Cf. Oscar de Smedt, *De Engelse Natie te antwerpen in de 16<sup>e</sup> eeuw*, Anvers, II, 1954, p.558〜592. いまだ満期になっていない債務証書や引受済みの手形がブローカーの仲介によつて割付いて「*au rabais*」買い取られちよえいつおり (*ibid.*, p.573)。この慣行は手形割付 (*l'escompte*) に向かわずにはじなかつた。Herman Van Der Wee, "Sporen van disconto te Anwerpen tijdens de 16<sup>e</sup> eeuw," (*Bijdragen voor de Geschiedenis der Nederlanden*, X, 1955, p.68〜70)

- (61) フォリッパ二世時代、為替相場が建てられていた都市の地図が以下に掲載されている。Henri Lapeyre, *Les Ruiz*, op. cit., face à la p.290.

\* 前注で言及された地図を引用しておく。

フィリップII世時代の銀行所在地

中世・近世の貨幣市場



- (62) Henri Lapeyre, "Economía y sociedad en los países de la Corona de Aragón durante el siglo XVI," (VIII Congreso de Historia de la Corona de Aragón, Tema II, La Corona de Aragón en el siglo XVI, Valence, 1967, p.20~22) 上記論文は H・ラペール教授からお知らせいただいた。

- (63) ルーアンは主にロンドンと関係を保っていたと言われている。Flory, op. cit., p.755~780. この点、イングランドの重商主義者の著書も同じ印象を与える。 Cf. R. de Roover, Gresham, p.108; Michel Mollat, Le Commerce maritime normand à la fin du Moyen Age, Paris, 1952, p.389~405; Henri Lapeyre, Les Ruiz, p.454~456.

一六世紀は大都市の飛躍的發展でもってそれ以前の時代と区別される。四大大市に数えられ、毎年メディナ・デル・カンポ、メディナ・デ・リリオセコ (Medina de Rioseco)、ヴィリヤロン (Villalón) の順に開催されるカステイリヤ大市については右でのべたところである。<sup>(65)</sup> ドイツでははじめはもっぱら商品取引にかぎられていたフランクフルト (Frankfurt am Main) が一五世紀末以降、為替業者をひきつけ始め、何よりもアントワープから振り出された為替手形の満期支払地となるに至った。一五〇〇年以前からもすこぶる重要であったリヨン大市は一六世紀ともなると、かつてシャンパーニュ大市が引受けていた国際的手形交換所の役割を担うようになった。<sup>(66)</sup> 前世紀から始まっていた伝統をうけつぎ、そこでは勘定決済は正貨での支払を最小にする方法である当事者間の振替で行なわれていた。<sup>(66)</sup> リオンでは為替市場 (la place) の銀行家は、主にフィレンツェ人 (カッポニー Capponi, ギンディ Gondi, マネッリ Manelli, マルテッリ Martelli, ストロツティ Strozzi) かルカ人 (バルバーニ Balbani, ボンヴィーシ Bonvisi, ブラマッキ Burlamacchi, ギイニーシ Guinigi) であった。<sup>(67)</sup> 不運にもリオンはフランス領土内にあった。そこで、フランスの国王は、大市から利益を引出し、さらに宿敵皇帝カロロ五世 (Charles Quint) の政策の金融に大市が利用されることを阻もうとした。カロロ五世に融資していたジェノヴァの銀行家達はリオンから追放され、一五二九年サヴォイ公の領地のモンリュイー (Montluel) リオン北東二〇四にある町 (訳者) やシャンベリ (Chambéry) に退いたが、結局そこか

らも放逐され、一五三五年の大市以降、神聖ローマ帝国の属地内の都市ブザンソン (Besançon) に身を落着けることとなった。<sup>(68)</sup>

当初から商品取引の流れがほとんどみられなかったブザンソン大市はもっぱら国際的決済を容易にし、為替手形の回路をつなぎ、戻し為替を伴う為替取引 (*cambio con la ricsorsa*) のような仮空の為替取引を助長することにつかわれていた。<sup>(69)</sup>『徴利』に関する教会の教義を遵守するには少なくとも形式上は、場所の隔たり (*distantia loci*) を十二分に重じる必要がある。ブザンソン大市はその名譽を守るため間もなく、サヴォイ公国からピエモンテに、さらに一五七九年、そこからピアツェンツァに移り足場を獲保したが、一六二二年にはついにジェノヴァ自身の港ノヴィ (Novi - Nervic、訳者) に移っている。いわゆるブザンソン大市 (ピアツェンツァやノヴィ等にもブザンソン大市の名を与えていた一訳者) には特にスペインの貨付契約 (*asientos*) やスペイン王自身の金融に深くかわつていたジェノヴァ人が出入していた。これらの為替業者はほんの一握りにすぎなかったが、ヨーロッパの半分の債権債務を彼等の大手手帳 (*carnet de foire*) による相殺で決済していた。

リヨン大市やブザンソン大市は勘定単位としてエキュ・ド・マルク (*écu de marc*) をもっていた。ただしリヨンにおいてのみ一五七五年以降、エキュ・オ・ソレーユ (*écu au soleil*) に変えられた。それらの貨幣は、他の通貨が為替相場の変数としてあらわされるすべての都市で相場の基準となった (*cotaient le certain*)。非基準通貨都市 (*les places qui leur rendaient l'incertain*) では次の大市で支払われる為替手形の相場は大市の接近とともに上昇する傾向をもっており、このことは為替相場の中にかくされた利子の存在を一度ならず証明している。<sup>(70)</sup> そのうえ大市からの戻し為替は通常、大市宛の最初の為替よりもより高い相場で作成されていた。実際リヨンの次の大市で支払われる為替手形を例えば、一エキュ・ド・マルクあたり七二グロの価格で買った銀行家が七四グロの価格、つまり為替相場の戻し為替でかれの貨幣をふたたび手にするならば、一エキュあたり二グロの利益を得ることは明らかである。

- (75) Cristobal Espejo et Julian Paz, *Las antiguas ferias de Medina del Campo, su origen, su importancia y causa de su decadencia y extinción*, Valladolid, 1912, p.VII-328. カステリア大市の役割に関するより満足のいく説明は以下を参照。  
 Henri Lapeyre, *Les Ruiz*, p.476-501. フィリップ二世による大市開催日の勝手気ままな延期は大市を大混乱に陥し入れた。  
 一六〇六年、カステリア大市ははつきりと衰退したが、一八世紀初頭のフィリップ五世の頃まで形だけはとどめていた。
- (76) 残念ながらリヨン大市に関する資料はフランス側の記録文書では欠けている。この欠如を補うためには何よりもイタリヤ、とりわけフィレンツェルカの豊富な資料にたよらねばならぬであろう。  
 Marcel Vigne を Marc Brésard の皮相な、今でもあり役にたたない文獻以外では Roger Doucet の非常な短く、脚注の一切みられぬ誤謬文を参照するのがよろ。  
 Roger Doucet, "La banque en France au XVI<sup>e</sup> siècle," (*Revue d'histoire économique et sociale*, XXIX, 1951, p.115-123) 貨幣世界そのものの資本主義の形成に関する巨著の論文が、R. Doucet, "Le grand parti de Lyon au XVI<sup>e</sup> siècle," (*Revue historique*, CLXXI, 1933, p.473-513, et CLXXII, 1934, p.1-41) 既述の資料とちがって、貨幣の流通の中心として Albert Chamberland et Henri Hauser, "La banque et les changes au tempt de Henri II," (*Revue historique*, CLX, 1929, p.268-293)。  
 だが、この論文は、Hauser が言っている限り、たゞ、この H. Lapeyre, *Les Ruiz*, op cit., p.451-454, p.456-474. の参照を要する。銀行所在が、たゞ、たゞ、貨幣交換の建つ銀行としての中心として研究する事はまだ多く残されている。
- (77) Henri Lapeyre, "Les paiements des foires de Lyon en 1618-1619, d'après les archives de la maison Cloton," (*Bulletin philologique et historique*, jusqu'à 1610), année 1964, p.221-230 ; Id., "Documents pour servir à l'histoire des foires de Lyon," (*Homenaje a Don Ramón Carande*, Madrid, 1963, p.221-246).
- (78) Roger Doucet, *La banque Capponi à Lyon en 1556*, Lyon, 1939, 48p. の図表に、参照。
- (79) Domenico Gioffrè, *Gène et les foires de change de Lyon à Besançon*, (Ecole pratique des Hautes Etudes, 6<sup>e</sup> section, *«Affaires et Gens d'Affaires»*, no. 21), Paris, S. E. V. P. E. N., 1960, 293p.
- (80) この題の論文は、参照の、Aldo de Maddalena, "Les hommes d'affaires lombards sur les foires de Bisenzone," (*Annales, Economies, Sociétés et Civilisations* > XXII, 1967, p.939-990)
- (81) José Gentil da Silva, *Stratégie des affaires à Lisbonne entre 1595 et 1607*, *Letres marchandes des Rodrigues d'Evoira et Veiga* (Ecole pratique des Hautes Etudes, 6<sup>e</sup> section, *«Affaires et Gens d'Affaires»*, no.9), Paris, S. E. V. P. E. N.,

1956, p.104 に付されたグラフ E を参照。実はこのグラフは一五九五年、九六年のリスボン、カステイリヤ大都市間の為替相場のものであるが、しかし、為替はどこにおいても同じ法則に従っているので問題はなからう。リスボンではポルトガル貨レイス (reis) の相場はカステイリヤ大都市で支払われるドウカート貨を相場の基準にして建てられていた。リヨンで支払われるエキュ・ド・マルク貨のアントワープにおける相場をグラフにすると、切れ目のないグラフではないが、da Silva と同様の破線の図が得られた。この為替相場のグラフこそ利子が為替相場の中に含まれていたことを決定的な形で明示している。da Silva は不思議なことにその証拠を手中にしながらもこの点を指摘していない。

(71) 注 (69) に引用した Aldo de Maddalena の論文に付された統計はこの種の数多くの例を我々に与えている。

一六世紀の創作であり、新機軸の取引として戻し為替を伴う為替取引 (*cambio con la ritorsa*) が大いに重視された。<sup>(72)</sup>しかし、用語が変わったからといって、事態も変わったわけではない。この言葉は神学者の裏をかき、彼等に合法的な取引であると信じこませることを目的としていた。実際 *cambio con la ritorsa* は、いくつかの特徴をもつといえ、為替と戻し為替取引 (*opération de change et rechange*)、<sup>(73)</sup>別言すればすでに一二世紀のジェノヴァの公証人の略注のなかにその数多くの例がみられた乾燥為替以外の何ものでもない。同様のことは同一の当事者相互の間での乾燥為替の馴れ合いにほかならない相落手形 (*cambio con continuazioni*) についても言えることで、それはアレツツォ (Arezzo) の商人ラッツァーロ・ディ・ジョヴァンニ・ディ・フェオ・ブラッティ (*Lazzaro di Giovanni di Feo Bracci*) の元帳 (一四一五〜二五年) にみられるところのこれほどの正確と明晰を望みえないベニス宛為替手形 (*cambium ad Venetias*) のいくつかの例と本質的に何らちがわないであろう。<sup>(74)</sup>アラゴンの王、アフォンソ五世 (Alphonse V, 1416〜58) もふくめ、君主みずからが国庫に重くのしかかることとなる為替と戻し為替の方法で資金を入手していたのである。

一五世紀と一六世紀のもうひとつの相違を述べるならば、それは片務的な諸支払の演じた役割である。さきに強調

したように一五世紀のローマ教会の送金は北ヨーロッパの国際収支の不均衡を緩和させるところか、反対に悪化させる効果をもっていた。ところが一六世紀になるとその絶対的意義は著しく縮小し、それにひきかえ一六世紀に重要になってきたのは低地諸国やイタリアに駐屯していたスペイン軍を維持するためになされたスペイン国王の送金である。これらの送金は国際的決済機構を動揺させるのではなく、その機構の円滑な働きを保障し、しかも実際のところ、カステイリヤのスペイン国王の忠実な臣下の出費でもってアメリカの貴金屬のヨーロッパ中への拡散をすすめることになった。<sup>(75)</sup>これらの送金はアシエントス (asientos) すなわち銀行家とスペイン国王 (Sa Majesté Catholique) との間で結ばれた契約を生み出した。

この契約は、一般に低地諸国やその他における資金貸付と、時には国王の歳入あての支払命令やインド艦隊が持ち帰った、あるいは持ち帰るのである貴金屬の輸出許可書によるスペインでの返済からなっていた。asientos 契約が結ばれる場合の為替相場は、いつも市場レートに等しいとはかぎらず、すでに利子や銀行家の時には非常に高率の手数料を含んでいた。しかしながら、その実態はこの記述で事足りるほど単純ではなく、多額の asientos になると、金融業者のシンジケートによって応募され、数社、あるいはいくつかの銀行所在地が一丸となった非常に複雑な協定を生みだしていた。<sup>(76)</sup>

中世において国際銀行業、つまり同じことであるが、為替手形取引は、事実上イタリア人のほぼ独占するところであった。一六世紀になるとイタリア人が彼等の支配的な地位を喪失したわけではないが、新たな参入者 (ドイツ人、スペイン人、ポルトガルのキリスト教に改宗したユダヤ人、フランドル人、さらにイングランド人) が彼等の列に加わった。一六〇〇年頃、巨商フッガー家はいわゆるスペインの破産できびしい打撃を被り、活動舞台から消え去った。その後継者としてジェノヴァ人は、彼等が建てた豪華な建造物やルーベンス (Rubens)、ヴァン・ダイク (Van Dyck) に描かせた肖像画が今なお証言しているように、ヨーロッパ最大の銀行家となったのである。彼等の中から幾人かは



スペインの高官にすらなっている。まことに貨幣は匂いをもたない。

- 注(72) 交響 Giulio Mandich, *Le Pacte de Ricorsa et le marché italien des changes au XVII<sup>e</sup> siècle*, (Ecole pratique des Hautes Etudes, 6<sup>e</sup> section. *«Affaires et Gens d'Affaires»*, no.7), Paris, S.E.V.P.E.N., 1953, 197p. や参照。
- (73) Raymond de Roover, “*«Cambium ad Venetias» : Contribution to the History of Foreign Exchange.*” (Studi in onore di Armando Saporiti. Milan, 1957, I, p.631~638) 参照。(この論文は以下に再録されている——註釋<sup>7</sup> Julius Kirshner, ed., *Business, Banking, and Economic Thought in Late Mediaeval and Early Modern Europe*, Selected Studies of Raymond de Roover, 1974, p.239~259)
- (74) Henri Lapeyre, “Alphonse V et ses banquiers,” (*Le Moyen Age*, LXVII, 1961 no. 4, p.104~111).
- (75) 貴金屬移動のより詳細な図表を参照。カロロ五世時代に關つては Ramón Carande, Carols V y sus banqueros, los caminos del oro y de la plata, Madrid, 1967, 627p., フェリナンド二世時代に關つては Fernand Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen*, 2<sup>e</sup> éd., Paris, Armand Colin, 1966, t.1, 2<sup>e</sup> partie, chap. 2, p.420~492. この章は全面図表と書を圖表として並び(第一版(第一巻だけ) Paris 1949, p.362~420. 二冊一変じつゝ。しかしながら、著者は「われわれならぬその最も手をつけずにおいたのである」部分を削除したり、書き変えたりしている。この二つの版を比較することは有益である。為替手形による決済が常に選好されていたので、銀行家達は地金や正貨の現送が他のトランスファの方法よりも有利であつても、やむにやまれぬ場合しかそれらにならなかつたことを強調しておこう。一六世紀をつうじて、地中海東部沿岸地方との西ヨーロッパの貿易収支は明らかに逆調であり、中世の提要は「ヴェネチアを出港するベイルート(Beirut)やアレキサンドリア(Alexandria, El Iskandariya)のカレー船が運り出す貴金屬をそれとなく語っている。一六世紀低地諸國の貿易収支については次の論文が参照。W. Brulez, “De handelbalans der Nederlanden in het midden van de 16<sup>e</sup> eeuw,” (*Bijdragen voor de Geschiedenis der Nederlanden*, XXI, 1966~1967, p.278~310). この論文の英語を題名で図表と再録する。Acta Historiae Neerlandica, IV, 1969. (pp. 20~48 に再録されている一記者)
- (76) Ramón Carande, op. cit., の表は以下を参照。Henri Lapeyre, Simon Ruiz et les Asientos de Philippe II (Ecole pratique des Hautes Etudes, 6<sup>e</sup> section, *«Affaires et Gens d'Affaires»*, No.6), Paris, S.E.V.P.E.N., 1953, 137p.

われわれはこれまで商業手形の流通性 (négociabilité) について明確な言及をさけてきた。中世為替手形は、例外なく裏書の方法によつては譲渡されておらず、ただ手形文言の中に記載された受取人 (beneficiaire) に支払われていた。しかも、為替手形の不渡りの場合ですら受取人は振出人 (tireur) に対して遡及権をまったく有さず、不渡りのままで手形満期日に支払を受けるかわりに、せいぜい拒絶証書作成費用や手数料をもとの手形金額に加え、その時の為替相場で戻し為替を計算して元の為替での貸し手 (datore) のために戻し為替を振出することができぐらいであった。中世の法律においてはもし為替手形が手形振宛人 (tire) によつて支払われなかった場合、振出人に対する遡及は、貨幣を提供した *datore* すなわち資金の貸手のすることであつた。<sup>(47)</sup>

イタリア人がより正確に *girata sul titolo* (証券での譲渡) と名づけた事柄にフランス語の裏書 (endossement) という語を与えたことは、元来譲渡の指図がかならずしも為替手形の裏に記入されておらず、時に補箋、すなわち手形に添付された補足の紙片にすら記されていたことから誤解をまねきやすいことを議論の最初に指摘しておこう。我々の考えではこのことは意味のない形式で、譲渡の有効性に影響するわけでもなく、ただ慣習の問題にすぎない純粹な形式にすぎなかつた。

畏敬するわれらの同僚、故 F・メリス (Federigo Melis) 教授は近年、ダチーニ文書館で一四一〇年日付の裏書された為替手形と一三九四年日付の補箋に書かれた裏書 (*girata*) を発見した。<sup>(48)</sup> だがここから裏書が一四〇〇年頃に一般化していた慣行であつたと結論するにはあまりにも例証が少なすぎるであらう。メリス教授はプラトにあるダチーニ古文書の五〇〇枚にのぼる為替手形の中からふたつの裏書の例を発見したのである。一羽のつばめが春をもたらすのではなからう。その上、中世の裏書は、為替手形を流通証券 (instrument négociable) に転化せしめたのではないし、また、支払人が善意であるか、重大な過失 (*de bonne foi et de bonne composition*) がないのであれば、被裏書人 (譲受人) が手形文書の中で指名されている受取人のために手形金額を受けることが有効であるということ以

上の権利を被裏書人＝譲受人に与えてはいなかった。不渡りの場合、被裏書人は遡及の権利も、また、自分の名前前で (ex proprio jure) 訴訟を起こす能力も決して与えられていなかった。

メリス教授の発見以降、一三八六年の補箋での譲渡や一四三〇年の正式に裏書きされた為替手形が発見されている。一四三〇年の為替手形はアラゴン国王アフォンソ五世宛に彼の聴罪司祭によって振出されたものである。これら二つの譲渡の間にはあきらかな類似がみられる。前者において為替手形はベニスに住む受取人 (beneficiaire) のために計らって、銀行所在地ではないザール (Zara, Zadar) 宛に振出された。後者では手形はバルセロナで支払われるものであったが、王はヴァレンシアの宮延に滞在するためすでにバルセロナを立ち去っていた。したがって、どちらの場合も手形振宛人と同じ町に住む新たな受取人を指名することが必要であった。

裏書の一般化は一六〇〇年かあるいは一六一〇年より以前にさかのぼることはない。この時代の為替手形やアントワープ市立文書館に所蔵されている為替手形の束の中に多数の裏書きされた手形がみられる。それらの若干は数回も裏書きされている。同様のことはフィレンツェ国立文書館所蔵の手形の若干の束についてもあてはまる。しかしながら、とりわけヴェネチアが有名だが、いくつかの都市は一八世紀になってすら裏書を禁止していた。

明きらかに銀行の外での債権譲渡 (assignation hors banque — 銀行振替による支払ではなくの意味 — 訳者) では債務者は完全には免責されないという久しく受け容れられてきた原理にもとづいて、法学者が商業手形の流通性 (négociabilité) の原理を展開しはじめたのもまた一七世紀である。この手形の流通性の原理によって手形持参人は、手形振出人やすべての裏書人に対し、これまで決して有していなかった遡及権を授与されることになった。振出人および裏書人は検索の抗弁権 (bénéfice de discussion) なしに持参人に対して連帯して責任を負うことになる。要するに本来の受取人 (beneficiaire) に対する支払人 (tire) によってなされる抗弁は、為替手形を対価を支払って譲り受けたあとの持参人の権利に何ら影響しないのである。

この法原理の結果、ただちに為替手形は商人間を広く流通する一種の信用貨幣 (monnaie fiduciaire) に転化した。流通のひろがりほどの程度であったかをのべることは困難であるが、恐らく経済学者が予想するよりはるかに広い範囲であったとおもわれる。最後に、手形の流通性 (négociabilité) は、ついに為替手形と為替契約をむすびつけていた絆を徐々に断ち切り、為替手形を単なる支払指圖書 (un simple mandat de paiement) となすに至った。しかし、ただこの発展はすでに見たように一九世末葉に至るまでは完成しなかった。

歴史家はいかなる理由から裏書が一七世紀初頭にかくも突然にひろがったのかを説こうとしてきた。この秘密の鍵は、恐らく一六世紀アントワープで行なわれていた支払方法の中に求められるのであろう。<sup>(80)</sup> アントワープでは債権譲渡 (assignment) による支払がひろく行きわたっており、イングランド人やハンザ商人により為替手形よりも好まれた債務証書が転々流通し、たびたび持参人に支払われていたと言われる。今日に至るもアントワープ文書館の困難な資料調査は不完全にしかなされていまいままである。Van Mechelen の名前からみて明らかにフランドルからの帰化人であるイングランドの重商主義 G・デ・マリンス (Gérard de Malines) の諸著作もまた問題解決に役立つ要素を与えてはいない。いまのところこの問題は未解決のまま残されている。

- 注 (77) 裏書の生成については以下を参照のこと。R. de Roover, *L'évolution op. cit.*, chap. IV, p.83-118, *The Rise and Decline of the Medici Bank*, op. cit., p.137-140, Cf. J. M. Holden, *The History of Negotiable Instruments in English Law*, Londres, The Athlone Press, 1955, p.1-98. 一・ホーンデンの同様に為替手形と債務証書とを区別している。
- (78) Federico Melis, "Una girata cambiaria del 1410 nell' Archivio Datini di Prato, (*Economia e Storia*, V, 1958, p.412-421)
- (79) Antonio Teja, *Aspetti della vita economica di Zara dal 1288 al 1409, 1<sup>re</sup> partie*, *La Pratica bancaria*, Zara, 1936, p.75-6; Henri Lapeyre, "Une lettre de change endossée en 1430," (*Annales, Economies, Sociétés et Civilisations*, XIII, 1958, p.260-264); ID "Los origenes del endoso de letras de cambio en España," (*Moneda y crédito*, no. 52, mars 1955, p.3-19.)
- アフオン五世宛に振出された為替手形の額面は九〇〇ドゥカートではなく、五〇〇ドゥカートである。

\* 銀行外での振替 (*ditra fuori di banco*) とは違って銀行内での振替 (*virement de parties dans les livres d'un changeur ou d'un banquier*) においては振替の後、たとえ銀行が倒産したため債権者が彼の債権を手にすることができなかったとしても、すでに債務は支払済として債務者は完全に免責されていた。ドゥ・ローヴァーはこの事実から裏書を銀行振替にもとめる見解を批判している (*R. de Roover L'évolution, op. cit., p.85-86*)。

\* 検索の抗弁権に関してはわが民法の以下の条項を引用しておく。

第四五二条 (催告の抗弁権) 債権者カ保証人ニ債務ノ履行ヲ請求シタルノキハ保証人ハ先ツ主タル債務者ニ催告ヲ為スヘキ旨ヲ請求スルコトヲ得但主タル債務者カ破産ノ宣告ヲ受ケ又其行方カ知レサルトキハ此限ニ在ラス

第四五三条 (検索の抗弁権) 債務者カ前条ノ規定ニ主タル債務者ニ催告ヲ為シタル後ト雖モ保証人カ主タル債務者ニ弁済ノ資力アリテ且執行ノ容易ナルコトヲ証明シタルトキハ債権者ハ先ツ主タル債務者ノ財産ニ付キ執行ヲ為スコトヲ要ス

第四五四条 (連帯保証人と両抗弁権) 保証人カ主タル債務者ト連帯シテ債務ヲ負担シタルトキハ前二条ニ定メタル權利ヲ有セス

(80) Herman Van Der Wee, "Anvers et les innovations de la technique financière aux XVI<sup>e</sup>-XVII<sup>e</sup> siècles," (*Annales, Economies, Sociétés, Civilisations*, XXII, 1967, p.1067-1089.) Id., "Antwerpens bijdrage tot de ontwikkeling van de moderne gelden banktechniek," (*Tijdschrift voor Economie*, 1965, p.488-500)

中世、近世の貨幣市場の構造が十分に知られるようになった今日、さらに一步踏みだし、景気変動の研究がなされるべきであろう。ただ、このためにはたとえ毎日でないにしても少なくとも接近した期間の切れ目のない為替相場の変動を示す連続した統計シリーズをもたねばならない。ではそれはどこにあるのか。それが問題である。一四、五世紀までさかのぼった時期についてこの点を解決することは容易ではない。一六世紀についてすら、今なお我々がもつ資料には空白があり、それを埋めることは容易でなからう。

為替相場は以下の多くの資料の中に示されている。(一) 商業通信、(二) 為替手形のコレクション、(三) 不渡りの際

に作成された拒絶証書、(四) マーチャント・バンカーの会計帳簿、(五) ブローカーが顧客に配る相場表 (伊 *listini*)。市場相場表 (*mercantiles*) が発行されるまでマーチャント・バンカーは、その地での最終の為替相場を書き記してコルレス先への手紙を結ぶという都合のよい習慣をもっていた。この習慣の無数の例が一四〇〇年頃のフランチェスコ・ダチーニや一六世紀の S・ルイスの商業通信の中にみられる。この種の資料は、手紙の差出人がただ相場の値を書き記すだけに満足せず、貨幣市場の状況について貴重な注釈をつけ加えていることからまさに最良のものである。たしかにこれらのマーチャント・バンカー達は法学部で学位を与えられた経済学者ではなかった。そうだからといって彼等が自らの職業を理解せず、彼等の注釈が全く無価値の戯言にすぎないと言うのは当を失するであろう。むしろ、われわれはマーチャント・バンカーが事情に精通した証人であり、彼等の提供する情報がしばしば理解を助けるものと考えている。言うまでもなくそれらは慎重、かつ明敏に解釈されねばならない。

為替手形自体に記載されている相場については、それらを蒐集し、カードに記載するのは骨のおれる仕事であろう。しかし、この作業は為替相場の騰落を教えるが、その理由までは説明しておらず、そのため全く限られた効用しかもたない統計や図表を与えるにすぎないであろう。拒絶証書は最初の為替相場のほかに戻し為替の相場を教えており、このことから少なくとも利子率の動向についての若干の手掛りを与えるにしても、そこに引用されている為替相場について同様に同じことが言えるであろう。会計帳簿の中にある資料もまた統計的目的に利用できるようにするには、それら帳簿を整理する長く、だからと退屈な労苦を必要とするであろう。ブローカーによって配布された相場表はあつかいやすいが、時代をかなり下るのでないかぎりその完全なコレクションを見つけるのは困難である。<sup>(8)</sup>

中世の景気変動の研究は容易に着手しがたい。目下のところトスカナ地方プラトにあるダチーニ文書館のきわめて豊富な資料にもとづく、一四〇〇年頃のブルージュ貨幣市場の研究しか存在しない。<sup>(9)</sup> この研究の補遺にある統計は、一三九五年から一四一〇年頃までのわずか十五年の期間であるが、ブルージュとバルセロナで建てられた為替相

場を与えている。この研究は最初の試みであり、恐らく深められうるであろうが、しかし、それでも今後とられるべき方法上の示唆を与えているであろう。革新のひとつはコンピュータの使用であり、これは中世の統計分析につかわれた最初ではなからうか。ロンドンやパリの貨幣市場に関して類似の研究がなされつつあるが、ダチーニ文書館にも豊富な資料のあるイタリアやカタロニア地方の研究はまだ手もつけられていない。ダチーニの古文書は残念なことに、フランчесコ・ダチニの死んだ一四一〇年で終っている。一五世紀の残り九〇年の資料がどこにあるのかといったことは別の問題である。メジチ家の古文書はばらばらの数字しか与えていない。しかし、イタリアの記録はきわめて豊富で、おどろくべき発見の可能性が残されているので絶望してはならない。商業通信のほかに忘れてはならないのはボルローメイ(Borromei)やサルヴィアーティ(Salviati)のそのような会計帳簿の存在であり、それはいまだ系統だてて調査されていない。

一六世紀に関してはたしかに少しはめぐまれている。しかし今日にいたるまでも、当時ウリャドリッド(Valladolid)に住んでいたメディナ・デル・カンポのマーチャント・バンカー、S・ルイス文書の豊富な資料の発掘にもつばらかざられている。これらの資料の助けをかりてH・ラペール教授は、一五七九年から九六年までのメディナ・デル・カンポと、一五五八年から九六年までの一層重要なリヨン大市で建てられた公定為替相場を示す図表を作成した。<sup>(85)</sup>彼はルーアンで建てられた相場もいくつか与えている。ダ・シルヴァ(José Gentil da Silva)はリスボンとカステイリヤ大市の関係を研究し、F・マルティン(Felipe Ruiz Martin)は、シモン・ルイスのフィレンツェ代理店からの手紙をアントワープで建てられていた為替相場を示す補遺を付してそれぞれ公刊した。H・ヴァン・デル・ヴェー(Herman Van der Wee)は一三九四年から一四一一年までのブルージュと、数年の脱落があるが、一五三五年から一五九五年までのアントワープにおける為替相場のグラフをわれわれに提示している。しかし、かれは数値を明らかにしていない。<sup>(87)</sup>。N・三三のグラフは主にV・デ・プラダ(Vazquez de Prada)が与える資料にもとづいている。W・ブルレッツ(Wilfrid

Brulés) は中断を伴いつつも一五七五年から九四年までのアントワープにおける為替の一般的動向をスケッチしているが、そこには統計やグラフが一切付されていないがため、彼の論説の意義を幾分ひくめて<sup>(87)</sup>いる。しかし、フランドル貨幣が一五七四年、一ポンド・スターリングⅡフランドル・グロ貨二四シリング二ペンスから一五九四年、エスラン銀貨 (escalin) で三四シリングへだんだんと低落し、その水準で一七世紀中、維持されたことを強調したことは正しい。実際、アントワープに関してあらゆる歴史家は、もっぱら自分のもつ資料をもつとも活用し、他の資料を気にもかけないままであるが、欠けていることは利用できるすべての資料に立脚し、利用する統計の中にある空白をうずめようとする概説である。<sup>(88)</sup>最後に L・デ・ローザ (Luigi de Rosa) が一六世紀末から一八世紀初頭までのナポリで建てられた為替相場を公表したことを記しておこう。<sup>(89)</sup>一六二〇年から一六二二年のナポリは、正常な水準に為替をひきもどした通貨収縮につづく急激な通貨膨脹のために危機に瀕していた。

注(81) アントワープ (Archives plantiniennes, No.1073) には為替ブローカー Jacomo Lemire によって作成された一九の銀行所在地あての一六八八年から一七一四年までの毎週の相場表のコレクションがある。アントワープは取引が徐々に減りつつあったとはいえ、一七、一八世紀をつうじてスペイン領低地諸国やそのほかオーストリアのための銀行所在地であった。さらにアントワープには Insolvente Boedskamer すなわち破産裁判所の訴訟記録の中に未整理のままの大量の相場表や情報が存在し、それらからは一七、一八世紀の二世紀間の全ヨーロッパの為替相場統計が作成されるであろう。

(82) R. de Roover, *The Bruges Money Market around 1400*, op. cit., この書物には Hyman Sardy 作成の統計が補遺に付されている。そこではコンピュータが為替変動と各地の相場間の関連を研究するためつかわれている。その得られた結果から季節的変動やすべての銀行所在地間の明瞭な運動の存在が確認される。

(83) Les Ruiz, op. cit., tableaux XI, XII, XIV, XV, XVI, p.464-471, 473-474, 499-501. 教授の同意されておられるが、われわれはメディナ・デル・カンポでリスボン為替は三七五マラベディス (maravedís) のカステイリヤ・ドゥカートを基準にしてポルトガル貨レイス (reis) で表示されていたと言ったことがでるであろう。

(84) José-Gentil da Silva, *Marchandises et finances, Lettres de Lisbonne, 1563-1578* (Ecole pratique des Hautes Etudes, 6°



section, 《Affaires et Gens d'Affaires》, No.14), Paris, S. E. V. P. E. N., 1959-1961, II et III. 景気変動に関する著者の注釈が含まれる第一巻はいまだ未公判である。ID, Stratégie des affaires, op. cit., chap. II et III, p.31-121 この二つの章は変動の山と谷の簡潔で興味深い洞察を与えているが、ただ利子要因はこの議論ではまったく無視されている。しかも donneur と preneur の混同もみられる。これらの言葉はその時代の用語では資金の貸し手と、手形の振出人、つまり為替で貨幣を入手する借り手というきわめてはつきりした意味をもっていたのであつて、ラベール教授やわれわれによつてずっと以前から明らかにされたことのはずなのだが。

- (58) Feip Ruiz y Martin, Lettres marchandes échangées entre Florence et Medina del Campo, (même collection, No.27) Paris, S. E. V. P. E. N., 1965, 485p. 第五章は為替と貨幣市場の変動を扱つてゐる。
- (59) Valentin Vazquez de Prada, Lettres marchandes d'Anvers, (même collection, No.18), Paris, 1960-1961, 4 tomes. 第一巻は貨幣市場を論じた序論(第五章、111-135頁)と一五五八年から一六〇六年までのアンтверプで建てられた為替相場の表(二六七-三二五頁)を含んでゐる。非常な長所は論述がきわめて明瞭だということである。
- (59) H. Van der Wee, The Growth of the Antwerp Market and the European Economy, La Haye, 1963, t. III (Graphs), p.76-79, 表III, 表III。
- (60) Wilfrid Brulez, "De wisselkoersen te Antwerpen in het laatste Kwart van de 16<sup>e</sup> eeuw," (Bijdragen voor de Geschiedenis der Nederlanden, XI, 1956, fasc. 2, p.81-92.)
- (61) R. de Roover, "Anvers comme marché monétaire au XVI<sup>e</sup> siècle," (Rev. belge de philol. et d'Hist. XXXI, 1953, p.1003-1047) は貨幣市場の変動についてかなりその構造を明らかにしてゐる。これはズートン及びオ. de Smedt, Engelse Natie, II, p.516-598.
- (62) Luigi de Rosa, I cambi esteri del regno di Napoli dal 1591 al 1707, Naples, 1955, 435p.

これらの著書の若干は時に應じて多かれ少なかれ、送金手段としての為替手形の役割を強調しているが、信用手段としての為替手形の役割をまったく顧みることがない。しかし、為替手形で、すなわちその当時の言い方では『通知

状<sup>9)</sup>」(sugli avvisi) 資金を動かしていたマーチャント・バンカーの最大の関心は、實際、送金手段としてではなく信用手段としての為替手形である。中世以来、マーチャント・バンカーが最も心にかけてきたことは貨幣市場の *larghezza* と *strettezza* の時期の交替を利用し、市場が緩慢なところで自由にしうる資金をもち、逼迫しているところで履行すべき支払をもって、不意打ちをくわないようにすることであった。貨幣政策にはただ為替市場に影響するかぎりにおいてしか関心を示さなかった。忘れてはならないことは彼等の目的が利潤を生みだし、損失をさけることであつた。そして、それ以外の事にほとんど関心をもっていなかった。中世および一六世紀の銀行家は自らを *hombres de negocios* と呼ぶ実業家 (*businessmen*) であつて、経済学者でも政治家でもなかった。

景気変動の研究を申し分のないものにするにはすべての研究は、統計図表やグラフをもたねばならない。グラフは何よりも為替の変動をすばやく理解させるので重要である。ただし、歴史家は自分自身のグラフを読みとる術を心得、論述がグラフの教えるところとくい違うことのないようにすべきである。どの縮尺をつかうかはそれほど重要なことでもないが、だからといって疎かにするのはまちがひである。このことでわれわれは伸び率を示すのに適するものの、貨幣市場の変動の研究にまさに必要とされる日々の為替変動を示すにはまったく役にたたない対数縮尺をつかうことに躊躇する<sup>10)</sup>。簡単な算術縮尺が最も好ましく、大多数の読者にもずっとわかりやすいという別の利点をもっている。最後に、グラフを読むのに拡大鏡があるほどいちじるしい縮尺もまたつかつてはならない。折れ線グラフは時には避けられないかもしれないが、つかわないほうがよからう。

注(16) H. Van der Wee, *Growth, op. cit.*, III, グラフ No 32, 33。彼は対数縮尺を使って曲線でなくほとんど水平な線を描いているが、これは為替相場がほとんど同じ水準にとどまっていること以外何も示していない。それにくらべ、de Rosa の著書の補遺 XV で示されたナポリでのブザンソン大市あての為替相場をグラフにしてみると、da Silva のリスボンでのカステイリア太市あての為替相場と同じ線影を施したグラフが得られた。これは普遍的現象であり、利子要因の遍在を明白に実証するものであ

20. 生憎、de Rosa は自分の分析を一層深く掘り下げることのできるこの種のグラフを提示していない。

本稿を終えるにあたって我々は最後に是非とも方法論全般にわたる意見をのべておきたい。経済史家は理論ではなく、現実の事象を研究するのであって、それゆえ経済発展、あるいは本稿におけるように貨幣市場の生成、展開を研究するところの諸現象にとって最も身近である社会生活のあるゆる要因を考慮しなければならない。それは法律、制度、商業技術を含む。本稿で終始のべてきたように『徴利』に関する教会の教義が銀行史で演じた枢要な役割からみて宗教さえも締め出すことはできない。

残念なことに経済学者は主に事実上、仮設の抽象にすぎないモデルや統計にもとづいて、もっぱら成長、つまり経済成長の問題にのみ経済史の領域を限ろうとする傾向をもっている。我々はその方法が意図してもちいられるかぎり決して拒みはしない。事実、我々自身もあれこれの研究でその方法をつかつてきたが、しかし、その方法に限界と危険があることを認識しなければならぬ。もつとも陥りやすいことは、現代にしか妥当しないか、あるいは当該の情況にしか適用できない理論を何らの修正をほどこすこともなく、それをそのまま過去にあてはめようとするアナクロニズムの危険性である。

多くの経済学者のあやまりは、自分達の方法を無理やり押しつけようとすることである。そのほとんどは歴史家にお門違いな説教をしている。彼等は決して古文書に足を踏み入れることなく、歴史的文献をほとんど知りもせず、さらに、例えば中世史家が闘わねばならない古文書学上の諸困難を理解することもない。歴史家は確かに叙述的であるよりむしろ分析的であり、説明的であるべきだろう。すなわち、まず理論の教えるところにうったえねばならないが、機転と分別でもってそうしなければならぬ。社会経済史家はもちいるにふさわしく、かつ主題の性格や自らの才気の洞察力とともに変る方法の是非の判断をただひとりで下さねばならない。

Raymond de Roover,  
Brooklyn College,  
Université de la ville de New York,  
Académie royale flamande  
des Sciences de Belgique.

(訳者補注) la Grande Table des Buonsignori (一一九頁)とはシエナの巨人マーチャント・バンカーが経営危機に直面し、その克服のため一二八九年、資本増加により商会の基盤を拡大せんとした試み《Grande tavola》のことである。この商会は、一二〇九年設立され、一三世紀中葉にはすでにフランスやイングランドに支店を開設していたが、一三世紀後半の政府融資のこげつきとフィレンツェとの競争から、一三〇四年、破産している。Dizionario Storico Politico Italiano, diretto da Ernesto Sestan, 1971, Firenze, p.230 (Buonsignoriの項目) 参照。この項目ならびにイタリア人の名前の発音等について本学教養部、高橋進氏(政治学)からご教示いただいた。記して謝意を表したい。

(追記) 付論「R・ドゥ・ロウーヴァーの貨幣市場論と為替手形―信用貨幣と信用制度(1)―」は紙幅その他の都合により、次号に掲載する。